公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部

300
2024 夏号

創刊300号記念座談会

これからのBulletinを考える

長野地域会建築祭レポート
覗いてみました他人の流儀
わたしの師
海外レポート
溶けた石 —鉄筋コンクリート建築の考古学— 第1回
Meaningful Garden —意味に満ちた庭— 第5回
建築家資格制度を考える 第4回
温故知新
活動報告
学生の会@joint活動報告

Bulletin

日新工業㈱ 代表取締役社長 相臺志浩（そうだいゆきひろ） 氏

防水材料や技術の開発を通して建物の長寿命化を支える

日新工業株式会社は、1922年に佐久間建材工業所として足立区で創業。日本で初めて改質アスファルトルーフィングやカラールーフィングを開発するなど、建築防水メーカーとして技術革新を続けながら業界を牽引してきました。現在は、ビルやマンションなどの屋上（陸屋根）に使用されるアスファルト防水やシート防水、塗膜防水から、戸建住宅の金属や瓦などの勾配屋根に用いる下葺材まで、多種多様な防水工法・材料を取り扱っています。
建築防水の歴史や現在注力している製品について、相臺志浩社長にうかがいました。

国産防水材の開発に挑戦

当社は1922（大正11）年に初代社長の佐久間栄吉が創業し、今年102年目になります。創業時から防水材を製造していましたが、当時主要な防水材だったアスファルトルーフィングは欧米の輸入品が主流で、国産品はトタン屋根程度にしか使われていませんでした。創業者の佐久間は輸入品を超えるルーフィングの開発に情熱を注ぎ、1930年頃には帝国議会議事堂（現在の国会議事堂）に採用されるまでに躍進。次第に国産品が本格的に使用されるようになりました。その後、戦時中の企業整備令で5社が合併し、1943（昭和18）年に日新工業が設立されました。

1956年には現在では一般的になっている改質アスファルト防水の原型となる改質アスファルトルーフィング「メルタンルーフィング」を日本で初めて販売。現在も改良を重ねながら使われ続けているロングセラー製品です。

日本は四季があり寒暖差があるため、防水材には高いレベルが要求されます。日本の防水技術が世界トップレベルなのは先人たちが築き上げてきた技術力の賜物です。

耐用年数がアップした「アスリードコート」「アルバエース」

2021年に発売したビルの屋上防水「アスリードコート」は、従来のアスファルトの耐久性を引き継ぎながら、より高い強度と伸びのある加熱型高耐久改質アスファルト塗膜防水材です。

「アスリードコート」引張試験

乾式浮床仕上げ工法「PFシステム」

これまでは防水材を3、4層貼り重ねていましたが、それを1～2層で対応可能にし、耐用年数も大きく改善。施工工程を大幅に短縮できるのもメリットのひとつです。

戸建住宅の屋根下葺材では、高性能で耐久性に優れたアスファルトルーフィング「アルバエース」を展開。940と呼ばれる従来の材料が耐用年数15年、改質アスファルトルーフィングが30年なのに対し、「アルバエース」は60年と大幅にアップしています。

屋上の防水層に直接設置可能な浮き床システム

防水で培った技術を活かして、屋上活用材にも力を入れています。乾式浮床仕上げ工法「PFシステム」は、屋上やルーフバルコニーなどでアスファルト防水の上に直に支持脚を立てて、その上にパネルを敷き詰めるシステムです。段差のある複雑な形状の場所にも設置でき、簡単に取り外すことができるためメンテナンス性にも優れています。専用のパネルもコンクリート系や木質系などバリエーションがあり、セットで販売しています。

また、当社は「水コン」という愛称で親しまれているアイデアコンペ「日新工業建築設計競技」を1974年から行っており、受賞者には現在活躍されている建築家の方も多くいらっしゃいます。建築業界への感謝と、若手建築家の方々に防水材料を知っていただくために今後も続けていきたいです。

建物の長寿命化が求められる今、これからも防水を通して社会に貢献していきます。

日新工業株式会社　https://www.nisshinkogyo.co.jp

建築・土木の防水や戸建て住宅の下葺材など、各種防水工法・材料を開発・販売。
環境対策にも有効な浮床システムや屋上緑化システム、遮熱塗料など屋根活用材も取り扱っている。

本社　〒120-0025　東京都足立区千住東2-23-4　TEL：03-3882-2424（代表）　FAX：03-3882-2450
全国8ヵ所に営業部隊があり、埼玉県春日部市と山形県山形市に工場がある。

Bulletin
300
2024 夏号

目次

● 特集

4 **Bulletin 創刊300号記念に寄せて**

4 JIAの機関誌として伝えていくこと　大宇根建築設計事務所 渡邉太海
5 Bulletin年表／Bulletinバックナンバー特別公開！
6 日本建築家協会の「建築家／Architect」と通念の「建築家」、その落差の先に　ASCO.partners 安達治雄
7 公益社団法人に移行して10年　構想建築設計研究所 上浪　寛

8 **座談会「これからのBulletinを考える」**

鈴木利美　鎌倉女子大学
市村宏文　エルスト
会田友朗　アイダアトリエ
Bulletin編集WG

● ひろば

14 **支部活動紹介**　長野地域会の「建築祭」　山田建築設計室 山田健一郎／小川原設計 小川原吉宏
16 **覗いてみました他人の流儀**　久住有生氏に聞く　自然の美しさを壁で表現する　Bulletin編集WG
19 **わたしの師**　ひとりぼっちになる勇気　アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所 田井幹夫
20 **海外レポート**　地球の裏側の裏側　小堀哲夫建築設計事務所 小堀哲夫
22 **溶けた石 ―鉄筋コンクリート建築の考古学―　第1回**　未来は過去にある　後藤武建築設計事務所 後藤　武
24 **Meaningful Garden ～意味に満ちた庭～ 第5回**　原体験は北九州で　アイダアトリエ 会田友朗
25 **建築家資格制度を考える　第4回**　委員長・地域サミット合同会議報告　梓設計 安川　智
26 **温故知新**　先達に学ぶ　成人　手嶋保建築事務所 手嶋　保
27 抱負を語る　ワーク･バランスの実現　ランビアーシ建築設計 ジェームス・ランビアーシ
抱負を語る　小さなジェスチャー　キー・オペレーション 小山　光
28 **活動報告**　交流委員会Fグループ　活動報告とAHR EXPO見学（米国シカゴ）　日本ビー・エー・シー 玉川厚志
29 交流委員会Gグループ　点群データによる空間情報の活用について　ウエルネス設計 古池廣行
30 **次世代のタマゴたち**
@jointとの出会いとこれから　東京電機大学 高橋花穏
まちの本棚　日本大学 紫安洋平

● あとがき

31 広報からのお知らせ　『Bulletin』編集長退任挨拶・新任挨拶／編集後記

2 **パートナーズアイ**　日新工業株式会社　防水材料や技術の開発を通して建物の長寿命化を支える

表紙写真：左　創刊300号記念座談会「これからのBulletinを考える」の風景
中　「十全化学本社社屋」 設計 キー・オペレーション（撮影：小川重雄）
右　長野地域会「建築祭」、卒業設計コンクールのプレゼンテーションの様子

公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹　Fax：03-3408-8294
https://www.jia-kanto.org/

Bulletin 創刊300号記念に寄せて

JIAの機関誌として伝えていくこと

関東甲信越支部長
渡邉太海

『Bulletin』が創刊300号を迎えました。

先日、建築家クラブの書棚を訪ね、これまでのバックナンバーを振り返ってみました。

創刊当初はJIAの組織づくりのための広報が中心で、次第にJIA会員の増強の検討、そして最近はHPなどと連携してJIA地域会の活動だけでなく、建築家の活動に加えて建築家以外の方の考え方なども掲載しています。

11年前に「公益事業」(243号)、17年前に「JIAをもっとよく知ろう！」(200号)、20年前に「若手建築家はJIAに何を求めているか」(173号)、「市民は建築家に何を求めているのか」(173号)などをテーマにした特集が組まれています。現在でも同じテーマで議論をすることがありますが、これまで先人の考え方や成果を振り返ることがありませんでした。JIA活動を発展させていくためには、時代の差こそあれ、過去にどんな議論をしていたのか知ることが重要です。会員誰でもが気軽に過去の記事が読めるようにアーカイブの充実を整えるべきと痛感しました。

最近の『Bulletin』に対して諸先輩から「字や写真が小さくてわかりにくい」「自己満足の記事が多い」「以前に比べて地域会や委員会・部会などの活動の様子が少ない」「季刊号になって寂しい」「一般誌のような読み物になっている」など厳しい意見や、「会員との架け橋となるべく、会員投稿、紹介、会員の広場的記事がもっと欲しい」「一般社会に直結した話題が欲しい」などの声もいただきます。

支部の広報委員会は大変な労力をかけてHPやメルマガ、SNSを駆使した配信を行っています。2017年のHP改訂以降、『Bulletin』は読み物、HPは地域会・部会からの情報発信の場、メルマガは急ぎの情報を会員に発信する、という役割分担を基本としています。HPには地域会や部会が直接掲載する仕組みとなっていますが、なかなか浸透していないのが現状です。会員の方々からのさまざまな意見を聞き、配信方法の周知と併せて『Bulletin』とHPの連携などを委員会とともに進めたいと思います。

『Bulletin』は機関誌として発刊され、今でもその役目は重要です。JIAの機関誌として大切なのは、活動の広報を行うだけでなく、JIAはどこを目指していて、何をやらなければならないのかを、繰り返し伝えていくことだと思います。

私は支部長になって2年の間、各地域会に伺ったり、地域会・委員会合同サミットで代表の方々とお話しする機会がありました。

その中でよく話題となるのが、一部の地域会の活動の停滞です。東京の地域会に属する会員は減り、最初から地域会に入っていない会員も多数存在します。地域会での活動の目的が何なのか、毎年なんとなくやらされているとか、また新しい会員が入らないためサロン化していくと聞きます。地域会の存在価値や強みは、その地域の行政・地元の声への対応、地元への丁寧な発信にあったはずです。

また登録建築家や建築家資格制度への関心も、残念ながら会員間で大きく差があり、「たくさん資格を持っているので私はもういらない」「登録建築家になるメリットはなに？」などの意見が聞かれます。建築家資格制度は私たちのためでなく、社会のためであり、市民や消費者が安心して設計を任せられる建築家という職業を確立することが目的だったはずです。地域会の活動の停滞や建築家資格制度についての認識が希薄なのは、もともとの目的やそれに向かって取り組むべきことを伝えていく力が弱く、会員間で議論する場が減っているからではないでしょうか。

JIAの定款第3条に「建築家の職能理念に基づいた基準を遵守することにより公益を保護し、建築家の資質の向上及びその業務の進歩改善をはかることにより、建築・地域・環境の保全と創造及び建築文化の発展に貢献し、公益に寄与することを目的とする」とあります。

ここでうたわれている「建築家」は社会に浸透しているのでしょうか？ JIAの目的に近づくためには、市民が安心して設計を任せられる「建築家」という職業を確立することが第一歩だと思います。そのうえで「社会が建築家に期待していることや不満なことに正面から応えること」「建築家を取り巻く業務環境を改善すること」「建築家の資質向上と会員間の交流を深めること」に取り組むべきだと思います。これらは個々の建築家でできることではなく、志を同じくする建築家が集まり、力を出し合うJIAだからこそできることです。

こうしたことを『Bulletin』で伝えていき、会員がJIAに入っている意義や誇りを感じ、社会に貢献する建築家の志を確認できる誌面を委員会とともに目指したいと思います。

Bulletin 年表

JIA関東甲信越支部 広報委員会 歴代委員長と Bulletin 編集長

年度	委員長	編集長	No.	
1987	平川國一		1~11	創刊号：1987.06（月刊）
1988		近藤経一	12~21	
1989	林 昭男		22~33	
1990		渡邉武信	34~45	
1991	渡邉武信		46~61	
1992		加藤将巳	62~70	
1993	林田 研	大隈 哲	71~82	
1994			83~91	
1995	小倉 浩	眞鍋喜嗣	92~104	100号：1996.01
1996			105~115	
1997	中山庚一郎		116~124	
1998			125~138	125号：表紙刷新
1999	米澤正巳		139~150	
2000		高木恒英	151~160	
2001			161~167	
2002	高木恒英	森岡茂夫	168~174	173号：JIA の周縁 174号：JIA の周縁
2003			175~181	
2004	森岡茂夫	櫻田修三	182~188	
2005			189~194	194号：JIA の未来
2006	中村高淑		195~201	200号：2007.04
2007		鈴木利美	202~208	（隔月＋アニュアル号）
2008			209~215	
2009			216~222	
2010	河村大助	湯浅 剛	223~229	229号：UIA2011
2011			230~236	236号：関東甲信越支部の歴史
2012		市村宏文	237~243	243号：公益事業
2013			244~248	246号：広がる活動の連携
2014	高橋隆博	八田雅章	249~256	256号：保存問題大会・アーキテクツガーデンの歴史
2015			257~263	
2016			264~269	
2017	市村宏文	長澤 徹	270~276	（季刊＋アニュアル号）
2018			277~280	
2019			281~283	（季刊）
2020		会田友朗	284~287	284号：表紙刷新
2021		関本竜太	288~291	
2022		望月厚司	292~295	
2023	田口知子	佐久間達也	296~299	
2024		関本竜太	300~	300号：2024.06

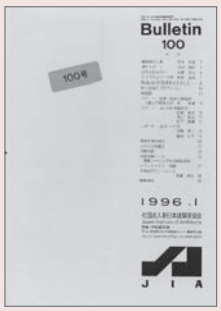
Bulletin バックナンバー特別公開！

300号を記念して、節目の号や印象に残る特集が組まれた以下の号を支部サイトに公開します。

1号　創刊号
100号　100号記念号
125号　「新支部長からの提言」
173号　「JIAの周縁」
174号　「JIAの周縁」（座談会「これからのJIA」）p.6 関連記事
194号　「JIAの未来」
200号　「JIAをもっとよく知ろう！」
229号　「UIA2011 TOKYO」
236号　「関東甲信越支部の歴史」
243号　「公益事業」p.7 関連記事
246号　「広がる活動の連携」
256号　「保存問題大会・アーキテクツガーデンの歴史」

特別公開はこちらから▶

◀264号（2016）以降は支部サイトに全ページPDFが公開されています。



特集を振り返る 1

日本建築家協会の「建築家／Architect」と通念の「建築家」、その落差の先に

―座談会「これからのJIA」を再読して―

本部建築家資格制度
実務委員長
安達治雄

2003年2月の座談会から、はや21年が経過した。座談会の記録を読んでいただければ、議論された内容の多くが今日にもなお、そのまま当てはまることを実感されると思う。

問題の構図がこの20年間、固定化している、その原因はどこにあるのだろうか。

Architectなら良いが、「建築家」とは名乗りたくない

一昨年のJIA沖縄大会での資格制度シンポジウムにて、若い世代のパネリスト数名が共通して語ったことに、「(趣旨)自分をアーキテクトと称するのには抵抗は無いが、建築家とは名乗りたくない」というのがあった。

実は30年以上前、私がJIAに入会した際にも、同じような忸怩たる感覚はあった。それは「建築家」という3文字からは、自称するにはあまりに尊大なニュアンスが拭えなかったからだが、脳内でArchitectに自動変換できるようになってからはその感覚はやがて消えていった。JIAの中では、建築家とは常にArchitectであり、JIAのAなのだった。

JIA内では建築家＝Architect、では社会一般は？

JIAの前身JAAはUIA加盟のために組織されたが、それ以来、日本「建築家」協会の「建築家＝Architect」とは、

① いわゆる「用・強・美」の統合的な解を実現する者
② 依頼者からの付託に第三者的な公正性をもって応えようとする無私の職能人(Architectural Practiceの主体)
③ Built Environment とその文化的な醸成について、社会的な責任を負おうとする者

これら①～③を同時に具現する、UIA的な職能像となった。

一方、日本の一般社会にとっての「建築家」の含意はほぼ、①に限定されているように思われる。もう少し言えば、その内の「美」という価値(造形・空間)を、依頼主の建物にもたらしてくれる人＝建築家、という位置づけであり、期待でもあるように思われる。

この期待は不安とも一体で、自分の美意識を依頼者の要望に優先するのが「建築家」、という敬遠にも通底する。

構図が変わらない原因は？

今、21年前と変わらない点としては、若い世代のアーキテクトが「建築家」の3文字に対し違和感を持っていることが、JIAに参加しない原因の一つであり、JIAの新陳代謝を妨げているように感じられる。

その違和感は、一つには尊大な語感からでもあるし、一つには商品化されたタレントのごとくこの語が使われる際の気恥ずかしさなのではないかとも想像する。

逆に言えば、JIAが社会に「建築家＝Architect」の前記①～③の全体像を流通させ、漢字3文字にまとわりついた日本特有のニュアンスを少しずつ払拭させることができれば、変化を呼ぶことはできるのではないか？ 私が所属する地域会の活動も、思えばずっと、その点を主眼にしてはきた。

JIAは「建築家」を社会に向かって資格の形で定義した

それにしても、もっと普通な言葉として受け入れてもらう手は無いのだろうか？ JIAが注力してきた建築家資格制度は、それに正面から応えようとしたものではあった。弁護士や医師と同じく、建築家とはその資格を有する者のことだ、と言えるように。それはニュアンスの排除も意味し得た。

座談会の翌年4月に登録建築家の第1回認定が実現したのだが、JIA自身が資格制度を企てた原点は1990年に遡る。

JIAの定款にも建築家の定義が無いなか、「建築家の法制が未だ存在しないわが国において、会の名称に建築家の称号をもちい、職能を目指す団体として発足したJIAは、法に代わって建築家とは何であるかを社会に示し、その存在と理念とについて社会の容認を得て行かなければならない責任を負っている。(鬼頭梓、JIA千葉大会)」との提言に端を発する。

以降の制度開始までの諸兄の努力や、並行したUIAの動き等の詳細は『Bulletin』277号に掲載のとおりだが、こうしてJIAは開かれた資格制度の形で「建築家」を社会に向かって定義したのだった。

定義のその先に

20年が経過した今、その社会への訴求力の問題から、建築家資格制度を見直す試みがJIA内で始まっている。ライセンスのモデルとして考えられたものを、JIAのメンバーシップに還元しようという内容も検討の俎上にのぼっている。

この場合もし、正会員の入会条件の透明化・厳格化を登録建築家と同等以上にできるのなら、公益保護の担保はたしかに得られるだろう。

ただし、座談会の隠れたテーマとも言える、アーキテクト(建築家)の本義を社会にいかにしたら理解してもらえるか、この常なる課題にどう繋がるかは、未だ見えてきていない。

ウェブサイトやSNSへのJIAの現在の活発なコミットメントは、社会へのアウトリーチとして非常に評価されるものである一方、「建築家」をArchitectの意味のままに普通の日本語にするための考案は、JIAの宿題としてこれからも続きそうに思われる。

特集を振り返る 2

公益社団法人に移行して10年

―移行の経緯と、公益化の目的―

2007-2009年 JIA理事
2010-2016年 関東甲信越支部長
2014-2016年 JIA副会長
2013-2018年 JIA総務委員長
上浪 寛

当時私はJIA理事をしており、2007年に設立された定款改定特別委員会に所属したのをきっかけに、さまざまな役職から公益社団法人移行に携わってきました。とくにこの特別委員会での「定款」「会員規程」「会費規程」の文案作成や、2013年に本部総務委員長に就任して3年ほどかけて残りの各種規定類を改定整備したのが大きな仕事でした。

今年で公益社団法人に移行して10年。当時を振り返って、改めて移行の経緯と公益化の目的を記します。

2008年12月 公益法人制度改革関連三法の施行

2011年9月、“Beyond Disasters, Through Solidarity, Towards Sustainability”をテーマとしてUIA東京大会が開催されました。JIAはUIA大会会期中に行われたJIA臨時総会で、新しい公益法人制度改革で公益社団法人へ移行することを決議しました。

1896年制定の旧民法に基づく旧公益法人制度は2008年12月に一般法人法として抜本改正され、112年間続いた旧民法公益法人制度は終わりを告げました。主務官庁制度（JIAの場合は国土交通省を主務官庁とした）旧民法34条法人であったJIAは、1956年設立当初から公益法人であり、収益事業を目的とした活動をする団体ではありませんでした。旧民法34条法人（特例民法法人＝公益に関する法人）であったJIAは、2013年4月に新たな定款を登記して、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（一般法人法）」「公益社団及び公益財団法人の認定等に関する法律（公益認定法）」「施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（整備法）」の公益三法に則り公益社団法人に移行しました。

旧法人も新法人も収益事業を目的としない公益法人ですが、旧法人は主務官庁（JIAの場合は国土交通省）の許可による自由裁量な公益法人格の付与であり判断基準が法律に規定されておらず不明確でした。新しい公益法人は、法律に基づき民間有識者が審査して法人格が付与されるという大きな違いがあります。法律の明文化がなく主務官庁の裁量が大きかった旧制度に比べ、現行制度は、法律に則って透明性が確保されています。公益事業とその他事業の区別は明確にする必要がありますが、JIAは公益事業比率が毎年65％を超えていることから、公益法人として、有意義かつ十分な活動が行われていると考えます。

公益法人を武器とした活動の展開

公益法人新制度改革で一般社団法人ではなく公益社団法人に移行したJIAは、公益事業を武器とした活動を団体内部でより明確にするために、2013年8月に公益事業委員会を立ち上げ、公益事業活動への助成を3年間にわたり行い、公益事業活動に対する認識を新たに確認する作業を行いました。公益法人になり今年で11年を数えますが、新旧JIA活動に大きな変化はなかったと思います。しかし新制度の公益法人制度が社会に普及するにつれて、周囲からのJIAに対する見方は明らかに違いが出ています。特に県単位で行政との関係密度が濃い地域では役所の見方が違う、融通が利きやすいという意見が聞かれるのが大きな成果だと考えます。東京近郊のように行政との繋がりが希薄だと思われる地域でも設計者選定に関する相談など、公益法人だからこそ発注者（行政）が安心して相談してくることが増えてきています。金銭の多寡に直接関係しませんが、JIAが受ける評価であり、会員の利益に直結していると考えます。

寄付優遇税制を受ける「特定公益増進法人」になること

公益性が法律で明記された新制度の多くの公益法人では、旧公益法人よりも寄付金収入額が大幅に増加しています。寄付優遇制度は欧米諸国に比べて遅れていましたが、「民による公益活動」の担い手として公益法人が寄付金収入を活用することは新公益制度の大きな目的です。

旧民法法人で寄付金優遇税制を受ける「特定公益増進法人」になるためには、主務大臣の認可が必要だったため少数（全体の3.5％）の団体に限られていました。新制度では、公益法人として認定されることで優遇税制対象の団体となり、JIAも自動的に「特定公益増進法人」になっています。

具体的な税制優遇措置は、法人ならびに個人から公益法人に対する寄付金の一定割合が所得控除されます。さらに一定の要件（PST要件[注1]）を満たしていることの証明を受けた公益法人への個人からの寄付は一定割合の税額控除が可能になります。公益法人に移行して10年を越えて活動が安定した今、PST要件の証明を受け、広く寄付を受けられる団体として公益に資する活動を発展させることがJIAに課せられた責務だと考えます。

〈注〉
1：PST（パブリックサポートテスト）要件：実績判定期間（約5年間）において、3,000円以上の寄付者数が実績判定期間年数×100人以上を満たすこと。

創刊300号記念座談会

これからのBulletinを考える

今回は『Bulletin』300号の記念企画として、これまでに『Bulletin』編集長を務められた鈴木利美さん、市村宏文さん、会田友朗さんにお集まりいただき、現役の編集ワーキングのメンバーも交えて座談会を開催。『Bulletin』の歩みをうかがいながら、『Bulletin』また広報委員会のあり方を意見交換しました。

参加者	**鈴木利美**	2007～2009年度 編集長
	市村宏文	2012～2013年度 編集長
	会田友朗	2020年度 編集長
編集WG	関本竜太	編集長（2021、2024年度）、広報委員会副委員長
	田口知子	広報委員会委員長
	佐久間達也	副編集長（2023年度編集長）
	小倉直幸	副編集長
	望月厚司	WGメンバー（2022年度編集長）
	中澤克秀	WGメンバー

左から時計回りに、中澤克秀氏、鈴木利美氏、市村宏文氏、会田友朗氏、望月厚司氏、佐久間達也氏、小倉直幸氏、関本竜太氏、田口知子氏

編集体制を整える

関本 編集長 本誌『Bulletin』は1987年の新日本建築家協会発足と同時に創刊し、今号で300号を迎えました。本日はこれまでに編集長を経験された鈴木利美さん、市村宏文さん、会田友朗さんに当時を振り返っていただきながら、これからの『Bulletin』あるいは支部広報のあり方などまで話せたらと考えています。

まず当時どういう経緯で編集長に就任され、どのようなお考えで編集にあたられていたのかお話しいただけますか。

鈴木 元編集長 私がJIAに入会したのが2003年で、まだ30代でした。総会の案内が届いたので会員は必ず参加するものだと思って行ったら、ちょうど建築家憲章の改訂を議論していた頃だったのですが、建築家の大先輩方が喧々諤々されていて、正直ちょっと引いてしまったんです。ただ、せっかく入会したので幽霊会員ではもったいないと思い住宅部会に入りました。住宅部会は似たような境遇の方たちが多かったので、そこにはなじんで活動していたら、住宅部会の先輩から広報委員になりませんかと声を掛けていただきました。

鈴木利美さん

その当時の『Bulletin』は、もちろんある程度の体裁がとられ立派な記事が並んでいたのですが、どこかバラバラと記事が集められた感じで、編集委員は誌面を埋めるために毎号頭をひねらなくてはならない状態でした。誰が何の記事を持ってくるか分からなくて毎号賭けをしているようで、これではいけないと思い、編集WGを必ず定期的に行うようにして、かつ誌面をCOLONNADE、FORUM、BACKYARDの3つにカテゴライズしました。そしてそれぞれの編集担当者も決めました。これによって編集体制が整い、遅れることなく発刊できるようになりました。これが私が編集長の頃にいちばん気に掛けて行った改革だと思います。

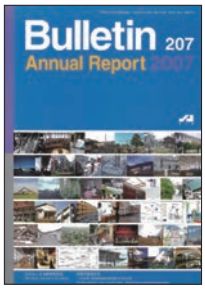
3つにカテゴライズしたのは、会報誌の役割を考えたからでもありました。会報誌は支部からの伝達事項のペーパーですが、会員同士のコミュニケーションの場でもあってほしかった。だからこの3つに分けたのです。COLONNADEは特集で、FORUMは会員同士の伝達事項とコミュニケーションの場、BACKYARDは事務的な伝達。最近の『Bulletin』を見てもこの骨格は変わっていないような気がします。

中澤 WG この構成にしたことで、今でも続いている「覗いてみました他人の流儀」や「温故知新」などのコーナーが始まりましたね。

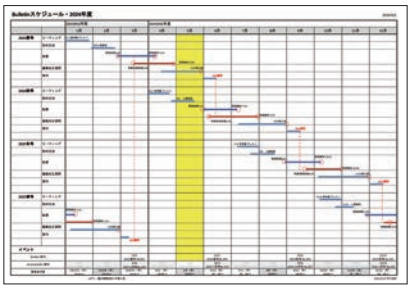
鈴木 元編集長 その他、私の前の編集長までは発行までのスケジュールを管理するWGメンバー共有の工程表がなかったんです。私は整理されていないのがあまり好きではないので、この号を出すためにはどの時期に何をすればいいのかを示した段取りの工程表を作りました。

市村 元編集長 これはきちんと受け継がれていて、今も形を変えながら残っています。

1987年発刊の創刊号
当時はB5判で発行



2007～2016年度まで
発行していたAnnual号


編集作業の年間スケジュール
会田さんが副編集長時代に刷新

WGメンバーで使用している
ツール「Slack」

関本 編集長 当時は毎月発行していたのでしょうか。

鈴木 元編集長 創刊当初は毎月発行していたようですが、私の時は隔月発行でした。

中澤 WG 年に1回総会報告がメインのAnnual号も発行していました。『Bulletin』が隔月発行で、その間にAnnual号が入ると3ヵ月連続で編集作業をしなくてはならないから、ある時からAnnual号の編集はホームページWG（以下HPWG）が担当することになりました。僕は当時広報委員会の副委員長でHPWGの主査もしていたのでAnnual号を何号か担当しました。

関本 編集長 市村さんは2012年度と2013年度の編集長で、2017～2022年度には広報委員長をされています。

市村 元編集長 僕がJIAに入ったのは2008年です。城南地域会に顔を出していたら、そこに鈴木さんがいて広報委員会に誘われました。初めの1年はオブザーバーとして参加して、湯浅剛さんが編集長時代の2010年に委員になりました。

その頃は2011年に東日本大震災、秋にJIA東京大会があり、僕が編集長になった2012年はJIAが組織の改変で公益化か一般化かという大議論をしていました。だから僕は支部が今やっていることを伝えようと思って、特集でもJIAで起きていることをテーマにしました。正直自分の視点で特集を組みたい気持ちもありましたが、その当時は支部のイベントも多かったんです。保存問題大会とアーキテクツガーデンという2大イベントがあって、それ以外にも新春の集いや総会、全国大会などを扱うと年間6号はそれで埋まりました。そう考えるとJIAの活動自体が今より活発で、伝えることも多かったですね。

年間通した特集を組む

関本 編集長 会田さんが編集長の2020年から年間通した特集が組まれました。そこには市村さんの後押しもありましたよね。

市村 元編集長 会田さんの時に特集を大きく組めるようになったのは、2017年に『Bulletin』が隔月から季刊になり、支部サイトがリニューアルしたことも大きかったです。会員が減少して支部が全体的に予算縮小を議論している時だったので、体制の見直しや経費削減で『Bulletin』の発行を減らして支部サイトも整えました。それまで委員会や地域会の活動報告は『Bulletin』に書いてもらっていましたが、それを支部サイトに載せてもらうようにしたのもこの時です。そうすると『Bulletin』の活動報告のページが空くので読み物の連載ページを増やすことになりました。

市村宏文さん

季刊になると編集作業も少しゆとりが生まれて、特集を組むことができるのではないかと会田さんに話しました。

会田 元編集長 僕は2016年にJIAに入って、すぐに当時の広報委員長の高橋隆博さんから電話がかかってきて「広報委員になりませんか」と言われました（笑）。だからJIAに入ってすぐ広報委員になったんです。

当時は長澤徹さんが編集長でしたが、広報委員長だった市村さんから特集を組んでみたらどうかという話が出ていて、2019年長澤さんが編集長3年目の最後の号で、「建築を通して何ができるか〈ローカルで仕事をする〉」という特集を組みました。この時僕は副編集長でした。

副編集長時代のことを少し話すと、僕は実は地味な改革をしているんです。編集作業の年間スケジュールを示した表が少し大ざっぱだったのでネットワーク工程表にしたり、ページ割りと編集作業の進行状況を記したExcelの表がありますが、それも記事ベースの今の状態に整えました。これらは今もDropboxでみんなで共有しています。Dropboxは長澤さんが導入してくださいましたが、これによって編集WGメンバー内でデータを共有したり同時編集できるようになったので作業効率がぐんと上がりました。その後僕が編集長になった時にSlackを導入しました。

関本 編集長 ここ数年でそういうIT系のツールを相当使いこなすようになりましたね。DropboxもSlackも今では欠かせないものになっています。Slackのおかげで電車の中でもレスポンスしたり、情報を書き込むことができるようになりました。

会田さんが編集長になり年間通した特集を組むようになりましたね。

会田 元編集長 僕は、「拡がる建築家の職能・職域」を2020年度の年間を通してテーマにして、これを前の年の秋ぐらいから構想を練っていたのですが、いざ自分の年度が始まるという時にコロナが始まりとても厳しい1年でした。4月、5月は一気にリモートワークが普及して、僕はそれまで『Bulletin』は事務所に届くようにしていたのですが、会社に行かなくなったので自宅に届くように変えたんです。『Bulletin』が家に送られてくるようになったことで、自分としては今まで以

写真を表紙全面に配置した4号（2020年度）

支部サイトにはバックナンバーを掲載

上に読み物ということを意識するようになって、急に情報源になったような気がしたのを覚えています。

誌面構成としても、支部の活動が激減しましたから、この時に特集を組んでいなかったら逆にネタがなかったのではないでしょうか。そこは偶然なんですけれど、コロナ禍だったからか執筆依頼も皆さん比較的引き受けてくださったような気がします。

関本 編集長 奇しくもコロナに入ったことがいろいろな変革のトリガーを引いた側面もあったのですね。広報委員会の会議もコロナ以降は原則としてオンラインに切り替わりました。

会田 元編集長 特集ではJIA会員以外の方にも執筆を依頼するようになって、会員に向けてこんな活動をしている人がいますよということを知らせるのが特集の方向性になりました。

中澤 WG 長澤さんが編集長の最後の年の特集から、JIAの会員ではなくても文章を書いてもらうようになりましたね。これは大きな変化だったと思います。

鈴木 元編集長 会田さんが編集長の頃に誌面が特集ベースに大きく切り替わったということですが、特集を組むことは以前からありました。ただ、年間通してテーマを設定したり、表紙も含めてよりビジュアル化することなどは変わってきたなと感じます。

紙で発行するということ

関本 編集長 IT系のツールも普及してきて、今後は紙の発行はやめてPDFなど電子媒体を支部サイトに上げて、読みたい人が読むようなスタイルも極端に言えばあり得るのかもしれませんが、皆さんどう思われますか。

市村 元編集長 僕は会員の皆さんはPDFより紙で『Bulletin』を読みたいと思います。印刷された文字の方が読みやすいのではないでしょうか。

鈴木 元編集長 紙の良さってすごくあると思うんです。やっぱり届くと嬉しいですし。Web上の文章は情報だと思って斜め読みして必要な情報だけインプットしようとしますが、紙だと考えながら読むんですよね。

会田 元編集長 僕が編集長だった時に「他人の流儀」で演出家でアーティストの高山明さんにインタビューしました。この取材記事が発行された後に会員の大先輩から電話がかかってきて、高山さんを紹介してくれと言われたんです。『Bulletin』を読んでくれているんだなと分かって嬉しかったですね。なので誌面の内容的にも、先輩方に若い世代の動きや世の中で起こってることを知らせるような役割を含んでもいいなと、そのとき思いました。

それから僕が担当した4号は表紙をそれまでとは大きく変えて、写真を全面に断ち切りでレイアウトすることに挑戦しました。これには写真選定からトリミング、調整など苦労しました。表紙全面に使うのだから写真家が撮影したような見栄えのする写真を使いたい、でも人の顔が写らないようになど配慮しなくてはならない点も多くて……。とくに1号目はどの写真をどう配置するかで1、2時間議論しましたよね。でもこうやって4号冊子として揃うと、やはり物としての良さがありますよね。

ただちょうどこの頃発行の1ヵ月後に支部サイトにPDFを公開するようにもなりました。このPDFをどのくらいの数の人が読んでいるのかは分かりませんが……。

市村 元編集長 当時AIAが完全にPDF一本にしていて、誌面はほとんど広告なんです。リンクで広告先のHPに飛べるから広告料が入ってくる。それも一度は検討したんです。ただJIAに合わない。やはり紙で手元に届く方が良いという結論になりました。もちろん今後それが変わるのもいいと思いますが、当面は紙で出して、発行後にPDFを公開するスタイルに落ちつきました。

中澤 WG 紙ではなくてPDFなど電子にしても、きちんと誌面を作るなら編集費用はかかりますから結局印刷代しか浮かないんですよね。

関本 編集長 会田さんのお話にもありましたが、紙で発行する意味は2つの側面があると思います。1つは読者である会員に対して。途中まで読んで付箋を貼ったり、電車の中で読んだり、読み物として手に取れる良さがありますよね。

もう1つは我々作り手にとっても紙であることは重要なことのような気がするんです。『Bulletin』編集をすべて編集会社に丸投げするんだったら僕は紙でも電子でもどちらでもいいと思うのですが、これを我々が手弁当で「表紙どうしよう」「次の海外レポート誰に頼もうか」などと言って、忙しい時間を削って動いている。それがもの作りとして密に関わっ

会田友朗さん

てるように感じられている部分です。我々が建築家として全責任を負って建築をつくるのと、『Bulletin』1冊を作るのは同じことだと思うのです。会田さんの4号の表紙は苦労しましたが、良いものができたとみんなで言い合えますよね。編集に関わる我々のやりがいにすごく繋がってる気がしています。そういった意味でも、紙媒体を特集ベースで我々がイニシアチブをもって記事を決定していける体制というのは、すごくやりがいがあるのではないでしょうか。

望月さんが編集長をされた4号も結果的にはすごく望月カラーが出ましたよね。

望月 WG コロナ禍だったので編集WGの会議もZoomでちょっとした話のニュアンスがなかなか伝わりにくくて大変でしたが、できあがったものには満足しています。

佐久間 副編集長 私は昨年度編集長を務めました。本当に毎号ちゃんと発行できるのかドキドキで。スケジュール管理がすごく重要だなと痛感しました。

関本 編集長 一番苦労されたのはどういう部分ですか。

佐久間 副編集長 執筆者を選定して依頼するところでしょうか。断られたこともありました。

会田 元編集長 あれは一番へこみますよね。

佐久間 副編集長 特集はこちらの恣意的な部分がかなり強いので、それを理解してきちんと書いていただけるかは最初すごく不安でした。

関本 編集長 佐久間さんは「強・用・美の進化」というテーマで、抽象性の高いテーマをどういう人に執筆を頼んで、それを最後にどう回収するかで苦労しましたが、春号の座談会は面白いものになりましたよね。

佐久間 副編集長 抽象的な内容でも会員の人たちに共有してもらえるか不安でしたが、逆にそれがかなり会員向けな雰囲気にはなっているのかもしれません。

会田 元編集長 我々建築家が、建築家の人たちに話を聞いて建築家に届ける、ある意味純粋な場とも言えますよね。施主におもねることもありませんから。

持続可能な編集体制を築くために

関本 編集長 私は2021年度に編集長を務めましたが、今年度また編集長を引き受けさせていただくことになりました。その背景には広報委員会だけでなく、JIAや社会全般的に起こってる人手不足という問題があります。皆忙しい中、本業以外の活動に熱量を傾けるのが、ある時期までJIAの中でも当たり前だったのでしょう。建築家クラブに行けばサロン的に建築家が集まっている時代から、そこに人が集まらない時代になり、コロナ禍がそれに決定打を与えたわけです。

そういった中で、広報委員会でも委員を引き受けてくださる人がいなかったり、編集長はなかなかみんなやりたがらない。そこで私がまた引き受けることになってしまったのですが、私も引き受けるのであれば意味のある年にしたいので、今年度は「持続可能なBulletin編集体制を築く」ということを隠れテーマにしています。

ここ数年は編集長が1年間分の特集を主導していましたが、それが非常に重たい任になってきています。そこで、今年度は私が編集長なんですが、統括編集長として少し引いた立場で全体をまとめようと考えています。そして各号の特集は毎号違う担当者が思い思いのテーマで作っていく。自分の問題意識や興味のある事象を自らが掘り下げて、自らが書いてもらいたい執筆者に依頼する。『Bulletin』編集に当事者意識を持って、楽しさや手応えを感じてもらいたいと考えています。

鈴木 元編集長 すごくいいアイディアですね。編集長の負担を軽くすることもですが、多様な視点で誌面を構成できるのはとても価値があると思います。

関本 編集長 小倉さんは今年度は副編集長として関わってくださることになりました。

小倉 副編集長 広報委員会に入れていただいて2年弱になります。はじめは2年間ぐらいと思っていたんですが、活動をいろいろさせていただく中で、どういうことができる場なのかが分かってきたので、私も自分なりにできることをしていきたいです。

これまでの変遷を聞くと編集長の考え一つでいろいろと可能性が広げられる冊子だということが分かりました。会田さんが編集長時代の表紙決めも議論があったのですね。佐久間さんの時も表紙の議論は白熱していました。私は専門が構造設計なので、私が活動することによってこれまでとは違う繋がりが生まれたらいいなと思っています。

Webとの連動の可能性

鈴木 元編集長 『Bulletin』はやはり会員向けの情報誌であるのは変わりなくて、一方的に情報を伝えるだけだったらそれはHPなど他のツールでできます。今後の『Bulletin』はぜひ対話型の情報誌にしていただきたい。この誌面で一方的に何かを伝えるのではなくて、読者と対話ができるような内容に

なっていくとすごくいいと思います。だから特集も個人のカラーで押し出してしまうのではなくて、自分はこう思うのだけれども、皆さんはどう思いますかというような余白を残してバランスを取る必要があるのではないでしょうか。そうなれば興味を持った人が広報委員会にやってきてくれることもあるかもしれません。

HPは電子媒体だからすぐに意見を述べたり、コメントを書くことができますが、ああいうことが誌面上でもできないでしょうか。例えばQRコードが付いていてそこから意見を投稿できるとか、対話型になってくるといいと思うのですが。

小倉 副編集長 掲示板コーナーがあってもいいかもしれません。

会田 元編集長 でも実際は投稿してくれる人がなかなかいなくて悩ましいところです。

鈴木 元編集長 普通に作ってもだめだから、何か工夫はできないでしょうか。

市村 元編集長 鈴木さんが言うように、今の時代はもう雑誌とWebは連動させなくてはだめだと思います。読んだ感想をWeb上に書いてもらって、それがある程度集まったら『Bulletin』でコーナーを作って載せるのもひとつですね。

鈴木 元編集長 皆さんからいただいた意見をもとにこんなページを作りました、この人に話を聞いてみましたというのもどうでしょうか。QRコードを読み込んだらその人の音声が聞けるのも面白そうです。今後は紙とWebの良さをミックスしたものができるといいですね。

会田 元編集長 そうですよね。この先を考えて参加型にできるところを含んでいけると面白いですね。

中澤 WG 今広報委員会ではメルマガの発行方法などについても話し合っていますが、メルマガは対話型に引っ張り出すにはいいメディアかもしれません。

市村 元編集長 今の支部サイトと『Bulletin』の形になって5年です。5年経つとツールも考え方も変わってくるのは当然ですから、また大きく変えることを考えてもいいと思います。

誰に向けた記事なのか

鈴木 元編集長 ちなみに『Bulletin』は変わらず会報誌なんですよね。広報委員がどういう意識を持ってその活動に当たるのかが重要です。外に対して自分たちをPRするのか、会員に対してきちんと伝えていくのかによって記事が変わってきます。

会田 元編集長 それは僕もずっと問い続けていて、広報誌なのか会報誌なのかというのは、ずっと悩んでいて未だに答えが出ていません。

市村 元編集長 僕はずっと会報誌という意味合いでやってきました。

会田 元編集長 僕も会員サービスという意識がまずあったので、会員外の活動を伝えようとしていたわけですが、ただそれは他のメディアを積極的に読んでる人にとっては自分でも得られる情報なわけで……。一方PDFを支部サイトで公開するということは、会員外の人も読むことができる。そういう意味では関東甲信支部の活動を外に発信する広報ツールにもなるんですよね。支部サイトをリニューアルした時に外への発信はWeb上での役割にしたのですが、実際は活動報告はなかなか上がらない。その結果、支部の活動が『Bulletin』にも支部サイトにもあまり出てこない状況になってしまっています。

でもこれを編集しているのがJIA会員であるという点もポイントではないでしょうか。そこにJIA会員である広報委員の視点が反映されていて、みんなで議論をしたりしながらある種の価値観を提示しているんだとすれば、JIAの広報の意味も担うのかなと思います。

鈴木 元編集長 広報は対外と対内の両方がありますよね。ですので、ある記事が誰に対してなのかが意識されていて、建築家の視点であることが大切なのかなと。ただ一般の人に向けて建築作品を紹介する誌面ではないと思うのです。

会田 元編集長 でも広報は基本的にはパブリックリレーションズだから、一般市民に向けてじゃないですか。僕は今JIA本部広報委員会 建築家PR動画推進WGの主査をやっていて、JIAのInstagramの運用を進めています。それはまさに社会に役立つJIAを市民にアピールするものですよね。関東甲信越支部の広報委員会としては、別に本部と全く同じことをする必要はないと思いますが、やはり内部の人だけの情報誌ではなくて一般向けに「建築家ってこういう人ですよ」「こういうふうに役立つ人ですよ」ということを会費を払っている建築家のためにするのも、JIAがやるべきことの1つだというのが本部の考えです。それを『Bulletin』でやる必要はないのですが、HPとSNSと『Bulletin』という3つをうまく運用していけると一番いいんじゃないかなと思います。

鈴木 元編集長 誰向けなのか、白か黒かにはっきりさせる必要はないんじゃないですか。

会田 元編集長 もうひとつJIAに単純に若い人が入らないという問題がずっとあります。『Bulletin』のバックナンバーを見ると、もう20年ぐらい前から同じ話が出ています。JIAに入りたいという30代40代の人を増やさないと、それこそ持続可能じゃないですよね。そうなると必ずしも一般市民向けのPRではなく、若い建築家の人たちに向けてという意味もあります。

関本 編集長 JIAに入っていない建築家の方には、JIAをどこか閉じた団体という、なにか窺い知れないプライドの高そうな、排他的な団体だというふうに思われてしまっている側面もあるような気がしています。持続可能というキーワードには、活動していて楽しいというモチベーションが根っこにないと続きません。

JIAは建築家の、建築家による、建築をより良くするための活動を日々続けているということを、広く知ってもらうこともやっぱり会員の裾野を広げるためには必要です。

会田 元編集長 僕の特集には建築家らしくない活動をしてる人たちを結構集めました。それは年配の建築家の皆さんが読ん

でいるだろうと思ったので、若い世代はこんなことやっていますということを、ちょっと皮肉じゃないけど、そういうメッセージを込めたつもりでした。

関本 編集長 会員外の方にも執筆してもらうようにしたのも、これまでだったら「なんで外部の人が書くんだ。これじゃあ会員が書けないじゃないか」という意見があったかもしれません。でも今会員外の人にも書いていただくと、執筆してくださった方が「JIAの冊子で文章を書かせていただきました」と皆さんFacebookなどに挙げています。そうすると、それを見た人が『Bulletin』を知ることになります。そうやって開かれたものにしていきたいですね。

開かれた『Bulletin』、開かれた広報委員会

鈴木 元編集長 私は今はもう設計をやめてしまって、もっぱら大学で教えていますが、そこで学生たちと接していて、自分がずっとしてきたことの問題点に気づいたんです。今まで自分は建築家がすべきことはこういうことだし、こういう住宅があったらいいよねということで活動してきて、それを強く押し出そうとしていたところがありました。今それが問題だったように思うんです。それを正直申し訳ないのですが、今皆さん方の発言の中から感じます。

社会に対して一方的に何かを発信しようとすることが、結果開かれていないことになってしまうのではないでしょうか。禅問答のようですが、自分たちは開いてるよということ自体が開いていない。これはなかなか難しいんですよ。だからどのようにすればJIAが本当に開かれた団体になるのかなと考えてしまいます。

田口 委員長 JIAは会員が自主的に運営する委員会や地域会によって成り立ってますが、一部地域会でメンバーが固定化して新しい人が入ってこない、という課題があります。いつもの同じメンバーでおしゃべりするサロンになってしまうと、新しい人が入りにくいですよね。「開く」というのは、外から分かる活動を行うこと、共有できるテーマを持った活動をすること、新たな人に声をかける努力など、活動体の意識改革が必要だと感じます。広報委員長になって、そのことを肝に銘じて運営したいと考えています。『Bulleitn』は特集ページをつくった時点で外に開かれ、読みものとして充実したと思います。一方で会報誌としての役割も忘れてはいけない、そのバランスが大切かと思っています。

外に開きつつ会員同士の情報交換・交流を活性化させる。両方をうまく回していける運営ができると理想です。委員会や地域会の活動に参加することで仲間と一緒に興味のある活動を企画したり、建築の議論を深めたりできるということがJIAの固有の価値ではないかと最近あらためて感じます。

鈴木 元編集長 お話を伺ってキーワードが2つあると思いました。「社会性」と「共有」です。地域会でうまく活動しているところは、地域住民と一緒に何かをしていたり、それは社会性があるからだと思うんです。そして共有は余白なんですよ。一方的に物を伝えたら共有になりません。だから社会性と共有がきちんとあれば続いていくことができるのかもしれませんね。

田口 委員長 そうですね。参加した人が何かを得られた、という満足感がとても大切ですね。余白というのは言い換えると、関係性が生まれる場とも言えるでしょうか。広報委員会は会報誌の発行という社会性があってわかりやすい。

関本 編集長 『Bulletin』はやはり性格としては会報誌で、会員向けの読み物であるということは変わりません。ただ排他的に会員だけで固めているものではなく、最近の取り組みとしては、会員外の執筆者も少し増えてきて、外側の違った遺伝子を中に取り込もうとしている。『Bulletin』の中のそういった取り組みもあります。

内部のことで言えば、これまでの数年間固定編集長で取り組むというものから、今は新陳代謝をするように毎年編集長を変えて流転させていく。その中でも今年は特集をさらに細分化して、担当者も分けている。それはどこに向かっているかというと、編集に携わる広報メンバーが当事者意識で関わる、自分が『Bulletin』を作っている、自分が広報に関わっているという意識をより色濃く持つことが、活動する楽しさに繋がり、持続可能な『Bulletin』に繋がっていくのではないかという仮説のもと、取り組んでいるところです。

市村 元編集長 鈴木さんの時代も僕の時代も、今までいろいろ変えてきていますが、会員の人から変えたことに対してクレームはありません。

鈴木 元編集長 たしかに特にクレームはないですね。

市村 元編集長 これはその時その時の広報委員の人たちがみんな真面目に話し合いながら作っているからなんですよ。多分読んでいる皆さんもそれを誌面から感じ取ってくれているのだと思います。今後も議論しながら作っていけば、その上で変えていくのは全然いいんです。一生懸命やっていることが見えると、大先輩たちも含めて皆さんちゃんと読んでくれますから。そこさえ外さなければ自由にやっていいですし、これからも新たなことにチャレンジしていってもらいたいです。

関本 編集長 今回、これからの『Bulletin』について議論すること自体ももちろん非常に有意義なことですが、これを『Bulletin』の誌面上に公開することが重要なことだと思っています。今ここに集まっているメンバーが、こんな薄っぺらい冊子にこんなにも熱く悩みながらやっていることが、少しでも会員の方に伝わることで『Bulletin』の重みが変わってくるような気がしますし、今まで以上に読んでもらえるものになるといいですよね。それが開かれた広報委員会にもつながります。広報委員会って面白そうだな、広報委員会でこのメンバーと一緒に『Bulletin』を作ってみようかなと思ってくれる会員が1人でも増えたら嬉しいです。

今日は本当に示唆に富んだ学びの多い時間でした。どうもありがとうございました。

（2024年4月4日 JIA館1階建築家クラブにて収録）

長野地域会の「建築祭」

―卒業設計コンクールや文化講演会を一般公開し、建築の楽しさを社会に伝える―

山田健一郎
長野地域会
代表

小川原吉宏
長野地域会
前事業委員長

長野県学生卒業設計コンクールの特徴

長野地域会（JIA長野県クラブ）では、長野県学生卒業設計コンクールを、2024年までコロナ禍においても途切れることなく33回実施してきました。このコンクールには他県にみられない特徴が3つあげられます。

第1の特徴として、大学・専門学校（高専）・高校と、3つのカテゴリーで学生卒業設計コンクールを開催していることがあります。長野県内には建築を学ぶことのできる大学が、信州大学1校しかありません。近県の新潟や群馬では複数の大学があり、それぞれの大学の特色ある作品でコンクールを競うことができるのを羨ましく感じつつも、信州大学からは毎年10点前後の応募作品があり、国内外で活躍するJIA建築家を審査員に迎えて審査講評いただける機会を学生たちも楽しみにしています。

大学が1校しかない一方で、広い県内には長野、松本、上田、飯田の各地域に県立工業高校があります。それぞれ教員の方々が熱心に指導されていて、毎年4～5校・30作品前後の応募があり、建築を学んできた時間は短いながらも、素直で新鮮な取り組みにはこれからの社会に対する期待が感じられます。審査員の方々にとっても、高校生の作品の審査は珍しい機会ですが、生徒の真摯な態度や眼差しに圧倒されながら、真剣に審査していただいています。生徒の多くは長野県に残って設計や建設現場で働き、何年かして建設現場で彼らと仕事を共にする機会もあり、活き活きと働く姿を頼もしく感じています。

高校卒業後2年間で建築を学んだ学生のコンクールも実施しており、上田情報ビジネス専門学校と長野高等専門学校からも、15作品前後の応募があります。いずれも、2年のカリキュラムの中での完成度の高さには目を見張るものがあり、専門学校ならではの社会や地域と結びついた教育のあり方には、大学や高校とは違った社会的役割を感じます。このように、それぞれの学習段階での卒業生が、地域社会と大きく関わっている点が第1の特徴です。

2番目の特徴として、卒業設計コンクールと文化講演会を1つの活動「建築祭」として、パッケージで企画運営し、一般市民に公開している点があげられます。

卒業設計コンクールは33回、文化講演会は32回を数えます。初期には同時開催していない時期もありましたが、2007年からは卒業設計コンクールと文化講演会を同時開催して、初日の文化講演会でお話しいただいた講師の方に、翌日の卒業設計コンクールの審査委員長を務めていただくスタイルを確立しています。第一線で活躍する建築家と学生の審査における交流が、かけがえのない出会い・機会をもたらすことを願っています。

地方において建築が、芸術・文化の領域として認知されにくい中で、一般市民が第一線の建築家の講演を聞き、学生の新鮮で力のこもった卒業設計作品の審査に触れることができる建築祭は、建築の楽しさを社会にアピールする絶好の機会となっています。

3番目の特徴として、建築祭は松本市美術館で開催しています。かつてはホテルの宴会場や交流施設のイベントスペースで行っていましたが、公共の美術館が建築の講演会やコンクールの会場となっていることは特筆すべき点です。特に2009～2017年の9年間は、松本市美術館が共催という形で、JIA長野県クラブが主催する文化講演会の他に「暮らしの空間セミナー」を主催してくださいました。2018年以降はJIA長野県クラブの単独開催となりましたが、建築文化にご理解をいただき18年間変わらず会場を提供していただいています。また、学生卒業設計コンクールの中で、一般来場者からの投票により選ばれる「松本市民賞」を松本市美術館から授与いただき、審査員に松本市美術館の館長に加わっていただいています。

今後も、学生卒業設計コンクールが、学生の教育支援活動に留まらず、地域における建築文化の発信の役割を果たすように、企画運営していきたいと考えています。

「建築祭」の運営について

建築祭の運営を行う事業委員会は、建築祭が終わって間もない6月から、次年度の開催に向けて1年間を通して委員会を開催しています。美術館施設使用計画・日程調整会議、会員アンケート投票による講師交渉決定、チラシ企画作成、建築祭企画書、学生へのコンクール開催の案内、審査員依頼、建築団体への後援依頼、参加作品

卒業設計コンクールのプレゼンテーションの様子

左：審査員と受賞者で記念撮影。前列左から、稲葉大将さん、松高葵生さん、中川颯人さん、加藤あゆさん、後列左から、小川稔館長、小宮山吉登氏、工藤和美氏、渡邉太海支部長、永井福二氏。中央：文化講演会、講師は工藤和美氏、右：懇親会

総数確認後タイムテーブル構成、展示レイアウト作成後美術館にて備品数確認、会員参加依頼連絡確認後の運営担当決め、美術館担当者との運営調整、講師審査員予定確認宿泊予約、懇親会場の予約、展示会場準備作品搬入からギャラリートーク・講演会・コンクールまで分刻みのタイムテーブル作成・備品確認・担当責任者の決定等、あらためて列挙すると膨大な作業を事業委員会が担当しています。事前準備段階から、委員会の担当者と事務局が綿密に運営計画を調整し、会場設営では、美術館の備品に加え、会員の手による展示台・ベニヤの搬入搬出などもあり、手作り感のある建築祭をつくりあげています。

第18回「建築祭」を開催

建築祭は「ひと、まち、建築 見つめようくらしの場」をサブタイトルに掲げ、先述の通り、公共性のある美術館を会場としています。一般市民にも講演会、卒業設計展・コンクールを公開し、建築家の社会での取り組みから県内学生の卒業設計作品までを鑑賞できる楽しいイベントとなっています。今年は2月24日・25日の2日間にわたり松本市美術館で第18回「建築祭」を開催し、文化講演会や卒業設計コンクールを行いました。

第32回文化講演会は会員アンケートにより建築家・工藤和美先生をお招きしました。「心地よい空気に、人は集まる」と題した2時間の講演会は、一般市民も含め90名が聴講しました。学校・公共施設の事例から利用者にとって「心地よい空気」をどのように設計してきたか、前例にとらわれない柔軟な発想を建築に踏襲していく過程を分かりやすく丁寧にお話しいただきました。質疑がたくさんあり時間が足りないほどの熱い講演会となりました。恒例の懇親会も工藤先生を囲んで大勢の会員が参加し建築談義が繰り広げられ盛況でした。

第33回卒業設計コンクールは参加数、大学6作品、専門学校12作品、高校26作品、合計44作品の公開審査会となりました。高校の部が9:00～10:40（公開審査・講評・表彰式）、専門学校の部が10：50～13：00（プレゼン・公開審査）、大学の部が14：00～16：20（プレゼン・公開審査）、そして16：20～17：00に講評・表彰式というタイトなスケジュールの中、会員司会者の素晴らしい進行により滞りなく運営することができました。

卒業設計コンクール公開審査中も一般来場者がプレゼンや質疑応答を聴いている姿が見られました。今年は春の3連休の開催でもあり、一般来場者による市民賞投票総数は198票を数え、大変大勢の方々に興味を持っていただいた成果だと思っています。

第19回建築祭に向けた事業委員会は6月より始動します。これまでの建築祭の理念を踏襲しつつ、さらに素晴らしい「建築祭」を実施できるように、企画・準備・運営を進めていきます。

久住有生（くすみなおき）氏に聞く
自然の美しさを壁で表現する

今回は左官職人の久住有生さん。日本を代表する左官職人として国内外で活躍され、伝統建築物の修復・復元から、商業施設や住宅の内装まで幅広く手掛けています。久住さんが内装を担当された店舗を見せていただきながらお話をうかがいました。

――幼い頃から左官職人であるお父様久住章さんのもとで左官の練習をしていたそうですが、左官職人を志すきっかけはガウディだったそうですね。

子どもの頃は壁塗りの練習をしないとご飯を食べさせてもらえなくて、夏休みは弟と一緒に砂をひたすらふるいにかける作業を無理やりやらされていました。僕と弟はそれが嫌で嫌で何度も家出をしましたね。なので左官にだけはなるまい、自分のやりたいことを見つけないと左官職人にさせられると恐れていました。

高校生の時、小さい頃からお小遣いをためてケーキを買いに行くのが楽しみだったこともあってケーキ屋でバイトを始めました。父の手伝いをしてきたおかげか、意外とすぐにケーキが上手に作れるようになって、ケーキ屋になるための学校に行きたいと父親に話したんです。でも反対されて、「ヨーロッパを回って世界を見てこい」と言われて、高校3年の夏に1ヵ月半1人でヨーロッパの建物を見て回りました。その時にバルセロナでガウディのサグラダファミリアを初めて見て感動で震えたんです。こんなものを人間がつくれるのか、しかも100年も前からつくり続けている。そして世界中から大勢の人が見に来ていて、この引きつける力は何なのか。とにかく圧倒されました。こういうものがつくれるなら左官もありかなと初めて思いました。

――ガウディを見て気持ちが変わったのですね。

ガウディを見た後は、ケーキ屋になりたい気持ちと半々くらいでした。父親に話したら「ケーキは食べたらなくなるけど左官は死んでも残るで」と言われて（笑）。今思えば子どもだましなんですけど、当時はガウディに感動したばかりだったので、純粋に「そうだな」と思えたんです。

高校を卒業してから半年間は父に仕事を習いました。習ったと言っても職人がたくさんいる中で掃除などをしていたくらいで、その後他の職人のところに2年間修業に行き、22歳で独立しました。

――お父様に習ったのは半年だけだったのですね。

父親とは仲が悪いわけではありませんが、ほとんど一緒に仕事をしたことがありません。なので父からはあまり影響は受けていないと思っていたのですが、ある時、父と僕と弟で講演させていただく機会があって、あらかじめ話す内容を考えていたのに、その8割を父に先に喋られてしまって。やはり親子ですから好きなものも考え方も似ているのでしょうね。

僕は淡路島で育ちましたが、実家は父の趣味で茶室のようなつくりだったんです。冬はとても寒くて嫌でしたが、でも子どもの頃から空間としてはきれいだなと思っていました。小学校から帰ると縁側で母親が作ってくれたお菓子を食べながら庭を見るのも好きでした。だから幼い頃から完全に父にコーディネートされていたのでしょうね。

――今回場所をお借りしたこちらのお店「はせ川銀座別亭」も久住さんが左官を手掛けられたのですね。

オーナーが文化的な方で、お花やお茶をたしなまれ、土壁も好きだったことから依頼していただきました。普段は壁一面を手掛けることが多いのですが、ここでは内装全体を自由にやらせてもらいました。僕は20代の頃は伝統的な文化財や数寄屋ばかり手掛けていたので、壁は主張するものではなく設えの中の背景という感覚だったのですが、都心にある店舗には作為的につくられた壁も合うので面白いです。

ヒビ割れた壁はこのお店のコンセプトを聞いてデザイ

「日本焼肉はせ川別亭 銀座店」

ンさせていただきました。ヒビ割れの大小は土の厚さや練り方で収縮率を変えることでコントロールしています。黒っぽい壁には淡路島の土に墨を入れています。土は子どもの頃から触っているので、見ただけでどんな特徴があるかだいたい分かりますし、どんな土でも扱うことができます。この店では少し間違えるとクラックが入ったりして落ちてしまう、その紙一重のところを狙う仕上げが多かったので、慣れた淡路の土を使いました。

地方での仕事も多いですし、あちこちで仕事が動いていますが、全国に弟子がいるので要求される技術に応じて職人を集め、最後の仕上げで模様を付けたりする時は必ず僕が入っています。

――空調の効いた空間でも土だけでヒビの入らない壁をつくることができるのでしょうか。

ここでは樹脂は一切使っていません。今はすぐに樹脂を入れようとしますが、下地を塗ったらざらっとさせれば樹脂を使わなくてもちゃんと付きます。昔の職人は当然自然素材だけでつくってきましたから、当たり前のことをしているだけです。

やはり自然の素材がいちばんです。今は特に東京ではプラスターボードの上に仕上げることが多いのですが、左官の下地で一番良いのは竹です。土を分厚く塗る分難しくなりますが、仕上がりは明らかに良くなる。特に伝統的な仕上げは土を塗り重ねたものの方がいいですし、作業の全てが気持ちがいいです。

それから土を塗り重ねたものは、傷んだら一度剥がしてまた塗り直すことができます。実は一番勉強になるのは剥がす時なのです。昔の人がどのようにつくったのかが分かりますし、当時の感覚や技術、そして何より美意識の高さには何度も驚かされました。

――左官壁の模様などは偶然生まれたように見えるものもあるのですが、久住さんの場合はいかがでしょう。

実はそこが難しくて……。本当は模様もすべて思うようにつくることができますが、それだとエゴと作為が強すぎて自分でもちょっとなと思うので、材料に影響されるような状況をあえてつくっています。例えば大きな砂利が入っていると塗る時にガタガタして塗りづらかったり、削る時はそれが邪魔して思うように削れなかったり。

それから大勢で手掛ける時は仕上げのパターンを具体的に伝えるのではなく、自分が思うイメージだけ伝えてそれで個人個人で作業をします。そうすると人によって、体の大きさも腕の長さも違うので、その違いが出るのがそれこそ自然でいいじゃないですか。僕は人がつくるものもきれいだけど、やはり自然がいちばんきれいだと思うので、その中間のようなものがつくれたら嬉しいです。

箱根・富士屋ホテル「レストラン・カスケード」の大壁施工時

塗る時は壁の前でじっと考えて取り掛かるのではなくて、いつも塗りながら雰囲気でつくっていきます。なのでいつも下絵はありません。どうせ下絵を描いても現場で変わってしまうので、サンプルはつくるけれどあとは信用してくださいと言ってやっています。本当に恵まれた仕事の仕方をさせていただいています。その場で色も変えられるし、表情も何とでもできるのが左官のいちばんの強みですね。

――建築家と協働されたりもしていますね。

若い頃は壁しか見ていなくて、腕さえあればいいという典型的な職人でした。でも建築家の方たちに、海外でのプロジェクトに声を掛けていただいたり、街や人を見る面白さや、壁は建築の中にあってそれも自然の中にあるというようなことを教えてもらいました。つくるものってどうしてもエゴの塊になってしまう面があるけれど、でもその上で何が大事なのかということを勉強させてもらっています。

一人でできるものなんて所詮知れていますし、建築家やデザイナーと一緒にやると共鳴して思いもよらないものができることも多いです。

――久住さんは建築ではなく額装された作品もつくられています。なにかきっかけがあったのでしょうか。

最初がガウディ始まりですし、もともとバロックやロココのレリーフが好きだったので、デザインしてつくるのは割と好きなんです。テーマはやはり自然です。淡路島に帰った時にきれいだなと感じる自然を壁で表現できたらいいなと思っています。ウルトラマリンブルーの顔料は淡路の海のイメージに近くてきれいなので好んで使っています。

額装している作品は、建築の左官とは違ってすべて自分でできますし、周りのことを考えなくていい自由さがあるので、時間がある時にはまたつくりたいです。

「Capita Green」（シンガポール）　エントランスの大壁を施工

――左官は歴史があるものだと思いますが、技術の進歩や時代の変化をどのように感じておられますか。

やはり急激に進歩したのはこの20年ぐらいで、海外の材料を輸入するようになってからかもしれません。淡路島でも、僕が独立して間もない頃は家を2、3年かけて建てていました。22歳の時には弟子が7人いましたが、2件仕事があれば全員食べることができました。それくらい左官の仕事量があったんです。でも新建材が出てから左官はほぼ下地屋さんになってしまいました。今はまた左官が選ばれることが増えているのでよかったです。

ただ心配なのは、内装は簡単に塗り替えられるものか、強くて壊れにくいものをよしとする考えが一般的になってしまっていることです。その考え方が自然や人がつくった良いものからはほど遠くなってしまったと感じています。日本の景観や文化など、これまで時間をかけてつくってきた大事なものがなくなってしまいそうな気もして、僕は今事務所も住まいも東京なのですが積極的に地元淡路のアトリエに帰るようにしています。そうしないと自分がどんどん便利さに引っ張られて、一番大事な守らなければならない部分を犠牲にしてしまうのではないかと思って……。とくに建築は人が生活する場所なので、そこの文化レベルの高さは絶対死守したいと思っています。

左官の立場からそこに働きかけたいのですが、そのためには職人が足りないので、左官の仕事をもっと見せて、その良さを知ってもらわなくてはいけないですね。そうして職人が少しずつ増えていってほしいです。

――久住さんのもとでみなさん何年ぐらい修業されて一人前になるのでしょうか。

10年以上経った子はもう何でもできますし、どこの現場でも対応できます。5年ぐらいで独立した子もそこから自分なりに経験を重ねて頑張っています。みんな腕がいいのはもちろんですが、所作がきちんと身についています。それができないとなかなか良い仕事はできませんから、そこは自信を持って言えます。

弟子たちには、左官の仕上げ方などの技術というよりも、精神というか、良いものをつくるためにはどうしたらいいかということを伝えています。つくっても気持ちが入っていないと単なる物質でしかありません。そういうことをみんな分かって仕事をしているはずです。

――それはどのような方法で伝えているのですか。

言葉で伝えます。1回言ってできなかったからほったらかしではなくて、毎回言います。今日も朝現場に寄ってきたのですが、お客さんが住んでいる現場だったので、「スリッパは用意してくれるけれど、自分たちで新しいのを持っていこう」と言いました。「養生した上を歩いたら、外に出る時は汚れが出ないように違うスリッパを履く」「家具を移動させる時は新しい手袋を使う」「帰る時は何もなかったようにきれいに掃除して帰る」、そういう些細なことばかりです。もちろんみんな分かっていますが、それでも毎日話します。

――最後に久住さんが左官をする上で大事にしていることを教えてください。

慣れないことですね。仕上げが変わっても基本的には毎日同じ作業するので、誰でも慣れてしまう恐れがあります。職人に毎日同じことを言っているのもそのためです。知っていると思うけれど、分かっていると思うけれど、それでも毎日同じことを細かいことまで全部言う。

慣れてきて手を抜いたとしても一般の方には見た目は分からないかもしれません。でも左官はその姿勢次第なんです。だから僕もずっと現場に立ち続けているし、必ず仕上げには入るようにしているのもそのためです。誰かが一瞬でも気を抜いたらやっぱり僕らが見たら分かるんです。それは器用不器用とは違いますから。

職人は朝起きて毎日毎日同じことを繰り返しているから上手になる、そしてきれいなものがつくれる、それだけでいいんです。これからもきれいな仕事をするために、慣れないように慣れないようにと言い続けていきます。

――貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2024年2月5日　日本焼肉はせ川別亭 銀座店にて
聞き手：小倉直幸・関本竜太・中澤克秀（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

久住有生（くすみ　なおき）

左官職人

1972年、兵庫県淡路島出身。祖父の代から続く左官の家に生まれ、3歳で鏝を握る。修業期間を経て、23歳で独立。伝統建築の修復、復元、商業施設、教育関連施設、個人邸まで幅広く手がける日本を代表する左官職人。2016年に日本国連加盟60周年記念インスタレーションをNY国連本部で発表。2023年にはG7広島サミットの会場施工を担当するなど国内外で活躍。自然との調和を常に大切に表現し、個展では額装によるアート表現にも取り組んでいる。

ひとりぼっちになる勇気

田井幹夫
1994～1999年 内藤廣建築設計事務所在籍

ちょうど30年くらい前の春過ぎのこと。僕はひとり夕暮れ、初めて伊勢神宮内宮の参道を歩いていた。平日の閉門間際の境内は人影も少なく、足が砂利に沈む音がやけに耳に届き、森を揺らす風音と共に神宮の神秘さを強調していた。その時、すぐ脇の斜面の木々の隙間に巨大な黒い物体がザッと動くのが見えた。猪だ！神の使い、あまりにも上手くいきすぎているではないか。翌日「海の博物館」を訪れるついでが、強烈な経験になった。

その頃いろいろあってスタッフ募集に応募した僕は内藤廣建築設計事務所にかなり迷惑をかけていたのだが、それでも内藤事務所以外ないと思い詰めていて、「海の博物館」を見ておかないわけにはいかないと伊勢鳥羽へ足を向けたのだ。なんとか入所に漕ぎ着け、その過程で受けた内藤廣さんの人間味溢れる対応はいまだに思い出すと身体が熱くなる。が、それを話すのはまたの機会にする。

内藤事務所での修行期間5年で、最初の1年ほどはさまざまな下働きをした。その後、茨城県立天心記念五浦美術館の実施設計から現場監理まで2年ほど担当した後は、コンペや提案物件などを内藤さんとサシでやらせてもらうことが多かった。これが良かった。出張のたびにいろいろな話を聞いた。ほとんどはプロジェクトのことだったが、僕も図々しいので余計なことをたくさん伺った。

内藤さんに入所当時よく言われたことがある。「建築雑誌なんて読むな、情報をあまり入れすぎるな」。僕はかなり「建築少年」だったので情報収集には余念がなかった。そんな僕に警鐘を鳴らしてくれていたのだろう。内藤さんは打ち合わせ中、よくすうっと目を閉じた。自分の内面に入り込んで答えを探そうとしているのだ。答えは自分の中にしかなく、外にある情報や他者からの影響は極力避けなければならない。

また、よく聞いたのが「建築村の言語だけ喋っていてもしょうがない」という話だ。狭い建築界での建築家同士の“馴れ合い”を嘆いていたのだろう。内藤さんが母校ではない東大の土木学科で教鞭を取ることにしたのも、「建築村」から距離をとりたかったに違いない。その後、東日本大震災での復興チームの要職、第二国立競技場のコンペ審査員、渋谷再開発のプロジェクトチーフなど、常人なら押し潰されそうな批判と重圧の矢面に立たされているが、それもあえて「建築村」とは別の場に身を置くことによる、“覚悟”の表れではないかと思う。

内藤さんは事務所内でよく「内藤さんは天邪鬼だから」と揶揄されていた。所外では極めて温和で誰にでも好かれる一方、所内では基本的には怖い顔で人を寄せ付けない。また、建築界に一矢を突き刺す鋭いことを語りながら、親父ギャグを受けるまで言い続けるようなところがあった。どちらも内藤さんの本質で、虚飾のないそのままの内藤さんだ。

昨年、自身設計の島根県立石見美術館で「建築家・内藤廣／BuiltとUnbuilt　赤鬼と青鬼の果てしない戦い」という展覧会が開かれた。「赤鬼と青鬼」として、自身の中にいる2つの人間性に対比的に語らせる。建築家同士が互いに認め合うばかりで批評性に乏しくなっている状況に対し、自作自演によって徹底的に「ひとりぼっち」になることで警鐘を鳴らしていたのではないかと僕は思う。

内藤さんから受けた影響は計り知れない。「わたしの師」にきちんと答えていたらおそらくキリがなくなる。

最後にいつも思い出す風景について。

打ち合わせ中、内藤さんはいつもメモブロックか手帳に、パイロットのVコーン（赤）でスケッチをしていた。それは何千分の一くらいから、1/1の原寸図、イメージパースまですごい精度で描いていた。スタッフにも案出しはさせるのだが、同時に内藤さんも描いてしまう。全く太刀打ちできない。内藤さんに勝とうという気はさらさらないが、でも悔しい。

今も時々お会いして、僕の作品について伺うと、内藤さんは自分のニオイのする作品性を好まない。もっと自分と遠くにある作品性を期待している。そうは言っても内藤さん、さすがに強烈な“内藤さん”を感じ続けた日々を経て、全く違う方向に到達するのは至難な技ですよ。でも内藤さん自身はそうやって自分を追い込んできたのだろう。

一生かかっても追いつくことができない「師匠」を持てたことを幸せだと思う。

地球の裏側の裏側

小堀哲夫

© Nacása & Partners

プラトー

身体中の刺青や羽の付いた帽子を被った先住民のデモを見た。ブラジルも北アメリカのようにインディオがいて、今もどこかに居住地があるのだ。デモは、ブラジリアのオスカー・ニーマイヤーのイタマラチ宮殿前で行われ、見学ツアーの感動の後だったので、急に現実に引き戻されたようで驚いてしまった。そもそも大地って誰のものなのだろうか？インディオの土地に対する考え方と、侵略とグローバルサウスの問題を垣間見た気がした。ブラジルはこれだけの建築と都市を実現しながら、貧困や人権の問題を解決できたのだろうか。ヘリコプターからどこまでも続く赤く痩せた土地や、背の低い樹種で覆われた緑の絨毯を見て、ブラジルとは夢のプラトーであると感じた。異邦人や遊牧民ではなく、大地に一本の線を描き、道を通して開拓し、建築、文明、文化をつくり定住する……。理想を求めて国家をつくるとともに、格差や争いも生まれていく……。一方の視点ではなく、インディオの感性や、その土地（プラトー）が持つ有機性と建築が持つ無機質なモノに対する根源的な欲求こそが、人類が地球に住むということなのかもしれない。

ボサノヴァとヴァロンゴ

本場リオのコパカバーナのミュージックバーの最前列で、ゆったりとした心地よい「イパネマの娘」を聴きながら、不覚にも寝てしまった。言い訳になるが、時差ぼけのなか街中を歩きまわっていたからだ。同時に頭の片隅に残っていたのは、街で聞いた不思議なアフリカのリズム。さまざまな人種の人々が白い装束で背丈以上の竹馬に乗りながら歌っていて、それもそこがヴァロンゴ遺跡の前だった。かつてアメリカ大陸に初めて黒人奴隷が運ばれた場所である。そのゆったりとしたリズムと歌声から、根源的な寂しさや懐かしさを感じた。

リオで最初に訪れた円錐形のリオデジャネイロ大聖堂は、素晴らしいと同時にそれと似た懐かしさがあった。外壁はコンクリートで鎧張りのようになっており、ピラミッド的な建築でありながら内部空間がある。中は鎧張りから漏れる光と風に溢れ、円錐空間に十字に配置されたステンドグラスの光の力強さが、このリオの大いなる救いの象徴になっている。

街に出ると、尾根や丘の山並みの中に無秩序に張り付くファベーラが見えた。よく見るとコンクリートやレンガ、トタンといったオープンな工業製品でつくられていて、それが秩序だって見えるから不思議だ。1日で100人も移動してきて1週間で自ら建築をつくっていく。そして住み続けたらその土地はその人のものになるらしい。そのような建築家なしの建築は生命感があり、食堂やカフェなどのコミュニティーも存在している。生命感や悲壮感を同時に感じたリオだった。

大きなモダニズムと小さなポルトガルモザイク

ルシオ・コスタが1954年に設計した集合住宅Parque Guinleは、ル・コルビュジエの5原則のお手本のような建築で、ユニテ・ダビタシオンを少し端正にした感じだった。驚いたのは、ユニテは小さなユニットであり、大衆のための1つの都市であったが、ここはファサードこそ小さなユニットに見えるが、実はワンフロア2～4世帯というプランニングであること。つまり、都市に集って住む発想が全く異なり、表層がアイコン化されていた。ファベーラの方が都市住宅に見えてしまうから不思議だ。その大きなモダニズムの建築の端に、小さなファベーラの都市領域が存在している。

ふと道路に目をやるとペイブメントが壊れていた。よく見ると小さな乱割の5cmキューブの石が敷き詰められている。ポルトガルモザイクだという。小さな白黒の石が大きな絵となり道路の舗装となっている。どこか華やかな街だと感じていたのは、このランドスケープのせいかと合点がいった。さらにキューブは取り外せ、付け足せ、模様も変えられ、そして永遠に使うことができる。小さな操作が都市の景観をこれほど変えるとは、地面のデザインがいかに大事であるかを気づかせてくれる。

遺　跡

サルバドールでカポエイラの民族楽器ビリンバウを弾くリーダーにステージへ連行されたライブハウスから一夜

ブラジリアの都市をテレビ塔から見たスケッチ

明け、アフリカの文化が色濃く残るコロニアルスタイルの街並みと外壁にカラフルな色彩が施された街並みを徒歩で抜け、飛行機で念願の世界遺産ブラジリアに到着。その街の対比からブラジルの多様性に驚愕した。

ルシオ・コスタがコンペで勝ち取ったプラーノピロットと呼ばれる飛行機形の都市基盤はなだらかな丘が連なる場所にある。遠くには空と丘が続き、シンメトリー軸線、そしてスーパーブロックは全てナンバリングされ、隅々まで住宅エリアがクルドサック状に集約されている。立体道路の四葉状の交差点はまるで未来都市を思わせ、都市をつくる感動と欲望が結実している。三権広場の終わりから水平ラインが引かれ、その先に湖が続いていて軸性が強調されている。無機質な土地に、建築と文明と文化の軸性と、有機的な定住の場をつくる人間の理想が結実しているとも感じる。この感覚は、紫禁城やアンコールワット遺跡で感じたものに似た、何か一時代の理想と挫折(サルバドールとは違う哀愁)を感じた。サルバドールの有機的な生の都市と、ブラジリアは何かが違う。むしろ無機質の生だ。私たち建築家は根源的に固定化された永遠性や無への期待、つまり無機質なものへの憧れを持つものだと強烈に感じた。

TUBO

ジャイメ・レルネルがデザインした都市クリティーバは、TUBOというバスネットワークによってでき上がっている。通常ならば、立体都市ネットワークが我々のイメージする近代都市だが、ここでは時間と労力とコストを削減するため、三連結バスの乗り換えシステムのバス停建築をつくった。ガラスの筒の中で、切符1枚で乗り換えが可能になっていて、それらを進化させているのが都市計画局IPPUCである。クリティーバの市長がIPPUCのトップを指名し、行政と都市デザインを運営している。私が面白いと思ったのは、人口が160万人に膨らんだ時にマスタープランの変更(2004年)があり、緑の都市軸が新たに設定されたことだ。多くの公園は川沿いにつくられ、都市が持つポテンシャルを最大限活かすことで、1人60㎡の緑を持つこととなった。ランドスケープを都市軸とした意味はとても大きく、これは日本でもすぐに実行に移すべきだと思う。

TUBO　(撮影:彦根明)

クリティーバは今では世界有数の緑化率を誇る都市になり、現在PLAN CLIMAという気候変動の緩和適用に関するアクションを行っている。統計やリサーチだけでなく、市民に対してわかりやすくグラフィカルに表現し、デザイン力で都市や建築をつくっていこうとしている。

私たちが現在直面している課題に対して、建物単体ではなく都市を多様なまま受け入れ、建築家チームと行政が一体となりデザインを統合していく。自然への憧れを大事に、既存の都市や建築のポテンシャルをリサーチし、お金がないことで出る知恵とともに小さくかつ即効性のあるデザインで素早く統合していくことこそ、我々建築家が今からできることだと感じた。

戦争の記憶

私がブラジルで一番感動したのは、リナ・ボ・バルディ設計のSESC Pompeiaだ。建築の説明を省くが、その社会背景の中から生まれた公共スペースのあり方が素晴らしかった。日本の公共スペースは国や行政が整備するが、ブラジルでは民間企業が社会保障の一環としてつくる。彼女自身の豊かな感性と強い信念によって、ドラム缶工場のリノベが決定し、新築部分もコンクリートのみという、質素だが逞しい建築となっている。そこでは、老人から子どもまで、スポーツや演劇、食事などをして1日過ごす。建築は質素だが大らかで、ひとりで過ごせる場所もあり、改修というささやかな設計行為で豊かな空間をつくっている。ホールも間口が狭いことをうまく利用し、細長い工場の中心にステージをつくり、谷状に座席を配置することで唯一無二のホールにしている。素晴らしく生き生きとした私的(詩的)な空間ができているのだ。

帰国後知ったことで、スポーツ棟の連結ブリッジや、開口部のデザインから強烈な哀愁を感じたのだが、これは彼女が母国イタリアの戦災の廃墟写真からインスピレーションを得たものだという。私はブラジルの旅を通して、建築家は生と死のようなものに矛盾を持ちながらも憧れ、懐かしさを持って新しさをつくるものだと感じた。

イタリアの戦後の廃墟写真
(撮影:深尾精一)

2020年のUIA世界建築大会がリオデジャネイロで開催される時に、南條洋雄さんに誘われたこの調査旅行は、コロナで延期延期の末、昨年やっと実現した。この地球の裏側の調査では世界を見る目が鍛えられた。ブラジルは世界を少し違うレンズで見ることが可能になる国であった。

最後にこの機会を与えてくれた南條御夫妻に感謝するとともに、家族のようになった20名の建築探検家たちにもお礼を言いたい。Obrigado!

未来は過去にある

後藤　武

ラーメン構造の謎

私たちが日頃何の疑いもなく当たり前に施工している鉄筋コンクリートのラーメン構造。あれはしかし、実に奇妙な構造ではないでしょうか。どろどろに液状化させたコンクリートを型枠の中に流し込み、固まって硬化したら型枠を脱型して出来上がる鉄筋コンクリートが、なぜわざわざ細長い棒状のかたちになっているのでしょうか。ル・コルビュジエが設計したサヴォワ邸のピロティ柱に至っては、変態の極みと言っても言い過ぎではありません。直径100mmほどの中空の型枠の中に鉄筋コンクリートを流し込んで柱をつくることの奇妙さ。それは、まるでプリンをストローの中に流し込んで出来上がりを楽しみに待っているかのようです。プリンはやはり、なるべく大きな深い器にたっぷりと流し込んだ方が美味しいはずです。プリンという液体を凝固させる食べ物の性質が、ゆったりとした器のかたちを求めているのではないかと感じます。なぜル・コルビュジエは、あんなに細い現場打ちの鉄筋コンクリート柱をつくりたかったのでしょうか。

建築設計のプロフェッショナルであるみなさんが、もし全てを忘れて全くの無垢な心でどろどろのコンクリートを目の前にしたら、一体どのようなものをつくってみたいと思うでしょうか。多くの人がマッシブな塊をつくりたくなるのではないでしょうか。あるいは薄く引き伸ばして面状の造形をつくりたくなるかもしれません。西沢立衛さん設計の「豊島美術館」は、全体のかたちが水滴をモチーフにしています。あの流動的なかたちは、かつて液体であったコンクリートの物性とぴったり合致しているように感じられます。塊にしても面にしても、それらは液体状のコンクリートの物性から導き出される欲望に従っているはずです。それに対してル・コルビュジエのピロティ柱には、そんな素直な欲望とは真逆な倒錯を感じます。では、なぜどのようにして鉄筋コンクリートのラーメン構造が生まれたのでしょうか。この問いに答えるためには、歴史を遡ってみなければなりません。当たり前すぎてラーメン構造の奇妙さに鈍感になってしまっている現代の私たちの先入観を打ち破り、当たり前が生まれた誕生の現場に立ち会う経験をしてみた時に初めて、私たちは鉄筋コンクリートラーメン構造を理解することが出来るのです。

考えてみれば、古代ギリシャ神殿の柱だって相当不思議です。大理石で出来た古代ギリシャ神殿の柱が、なぜ円柱のかたちをしているのでしょうか。今度は古代ギリシャの労働者の気持ちになってみて、山から大理石を切り出してみましょう。無垢の大理石の巨大な塊の山の中から円柱のかたちを削り出していくのは、不自然な気がします。四角い塊で切り出していく方が合理的です。ただし、切り出した大理石の塊を運搬することを考えてみると、円柱のかたちが合理的に見えてきます。転がして運んでいけばいいわけですから、四角よりも円柱の方が運びやすそうです。運搬するためという理由以上に、古代ギリシャの柱が円柱である理由がありました。それはかつておそらく、古代ギリシャ神殿の柱は木の丸太だったからです。木の幹は円柱状に成長していきますから、そのかたちをそのまま使って柱が円柱状になっていることは納得がいきます。しかし木は腐りやすく、また古代ギリシャで木が少なくなっていったこともあって、豊富な資源であった大理石に置き換わっていったと言われています。今、古代ギリシャ神殿の遺跡を訪れると、どの遺跡にも屋根が架かっていないことに気付かされます。それは、屋根だけが石に置き換えることが出来ずに木でつくられていたからです。梁と呼ばれる梁は大理石に置き換わりました。柱のスパンを狭くしていけば、梁を重い大理石でつくることは出来ました。しかし屋根は、スパンが飛びすぎてしまって、大理石に置き換えることが出来なかったのです。そのために後世になって屋根はすべて腐って落ちてしまったというわけです。材料が置き換わった時に、以前の材料でつくられたかたちが残存すること。古代ギリシャ神殿の柱のかたちには、こうした記憶の伝承のメカニズムが働いているのです。

鉄筋コンクリートラーメン構造についても、実は同じことが言えます。19世紀に鉄や鉄筋コンクリートという材料に興味を抱いていた建築家や技術者たちは、中世ゴシック建築の構造こそが最も優れていると考えていまし

た。石という重い材料で出来ているにもかかわらず、あんなに細い柱やリブと呼ばれる細い梁、大きな薔薇窓が穿たれている中世ゴシック建築の構造に、これからの新しい建築のモデルを見出していたのです。[注1] 中世ゴシック建築の構造原理に基づいて、さらにその考え方を発展させていくことが出来ないか。そう考えた19世紀末の建築家や技術者たちは、中世ゴシック建築の石を鉄や鉄筋コンクリートに置き換えて新しい建築を生み出していこうとしました。石を使って細い柱や梁の建築をつくっていた中世ゴシックの建築を、材料を置き換えて新しくつくり直したものが、鉄筋コンクリートによるラーメン構造だったのです。鉄にしても鉄筋コンクリートにしても、元はどろどろの液体です。液体を細い棒状のかたちにするのは奇妙なことではありますが、その背景には、このような材料の置き換えのプロセスが隠れていたのです。

掘立柱とピロティ

ル・コルビュジエは中世ゴシック建築の構造にとても興味を持って勉強していましたが、他にも彼が関心を抱いていた古い建築がありました。それが、アルプス地方の湖に浮かぶ歴史遺産ウンターウールディンゲンの杭上住居群でした。木の細い掘立柱が水の上に立ち上がり、その上に人々の暮らしがある古代の遺跡です。ル・コルビュジエはスイス・ジュラ地方の小学生の時にこの古代遺跡の存在を知りました。この杭上住居群は、サヴォワ邸に似ています。かたや木造の古い掘建小屋、かたや鉄筋コンクリートのモダンで先進的な建築。両者は全く両極端な建築のようにも見えます。しかし原理的に見れば、両者はとてもよく似ています。ル・コルビュジエは、ウンターウールディンゲンの杭上住居群を参考にして、現代的な原始の小屋をサヴォワ邸で実現させようとしたのかもしれません。[注2] 過密で壁だらけのパリの街並みは、当時流行していたスペイン風邪などの感染症の温床にもなり、不衛生だった。風通しよく、緑溢れ、太陽を浴びる原始人のような生活を現代人にもたらすために、ル・コルビュジエは近代建築の五原則を打ち立てました。彼の近代建築のモデルの一つは、原始の掘建小屋だった。だからこそ、細い円柱が必要だったのです。

こうして、私たちが熟知しているはずの鉄筋コンクリートラーメン構造の歴史性の一端が明らかになってきました。現代的な建築技術も、実は歴史に深く根ざしています。歴史を遡ることによってのみ、その建築技術の本質を理解することが出来ます。私たちは学校で、近代建築の歴史を教わってきました。しかし、産業革命の技術革新の結果として誕生した鉄や鉄筋コンクリートの建築を、産業革命以前の建築の古い歴史と結びつけて考えるようには教わってきませんでした。ジークフリート・ギーディオンという歴史家がいます。近代建築史をつくり上げた重要な歴史家です。彼はル・コルビュジエなどの近代建築家をアメリカで有名にすることに貢献しました。彼は、鉄や鉄筋コンクリートの建築を、石造りの古い西洋建築にとって代わらせようとした近代建築のプロモーターだったのです。私たちは学校の建築史の授業で、このギーディオンの考え方に基づいた歴史を教わってきました。それによれば、近代とそれ以前は断絶しています。しかしそろそろこの考え方を見直すべき時にきていると思います。鉄筋コンクリートラーメン構造に対する私たちの先入観もギーディオンの歴史観に起因しているような気がするからです。

©Pfahlbauten Unteruhldingen

ウンターウールディンゲンの杭上住居群[注3]

©DJ UCHINO

ル・コルビュジエ　サヴォワ邸

歴史から未来へ

私たちにはプロフェッショナルとしてたくさんの建築知識が身についているからこそ、既成概念に縛られがちです。もう一度無垢な眼で、当たり前を見直してみたいと思います。鉄筋コンクリートは、19世紀末に生み出された建築技術史上最大のイノヴェーションでした。そのイノヴェーションが生み出されたメカニズムを知ることは、これからの新しいイノヴェーションを生み出すために必要なことだと思います。歴史を学ぶことは、過去の知識を得ることが目的ではありません。未来の新しさを生み出すためにこそ、歴史が必要なのです。鉄筋コンクリートの時代が終わりを迎えようとしている今こそ、鉄筋コンクリートというイノヴェーションの本質を考え直すことが必要です。これから8回にわたって続くこの連載では、鉄筋コンクリートの誕生から日本への受容、そして現代デザインに至るまで、鉄筋コンクリートという材料の本質に向き合ってきた建築家と技術者の思考の軌跡をたどります。建築における新しさとは一体何なのか。どのようにして新しさが生み出されるのか。古くて当たり前の鉄筋コンクリートという材料を題材にして、これからこの連載で考えていきたいと思います。

〈注〉

1：初期鉄筋コンクリート建築の誕生において、中世ゴシック建築の構造が果たした歴史的な役割については、以下の書籍で詳細に論じてある。『鉄筋コンクリート建築の考古学―アナトール・ド・ボドーとその時代』（東京大学出版会、2020年）

2：Adolf Max Vogt, *Le Corbusier, der edle Wilde. Zur Archaeologie der Moderne,* Vieweg, Braunschweig / Wiesbaden, 1996.

3：出典　https://www.pfahlbauten.de/en/

原体験は北九州で

会田友朗

2004年9月。夏季休暇で一時帰国していた東京からニューヨーク・JFK空港に着くと、携帯電話の着信を示すランプが点滅していた。スタジオ・ダニエル・リベスキンド（以下、SDL）の上司エリックからの伝言で、担当する香港のプロジェクトが急遽ストップしたことを知る。ブルックリンの倉庫地帯、赤煉瓦と金網の乾いた風景を疾走するタクシーの車中、全身の力がすっと抜けていくのを感じた。プロジェクトはいよいよ実施設計という段階。僕は香港に常駐しての現地チームとの協働をとても楽しみにしていた。竣工を見届けて日本に本帰国することを漠然と想像していた。その目論見は脆くも崩れたが、不思議と清々しく、決断は早かった。NYの事務所に残る選択肢もあったが在米5年はひとつの区切りだと感じた。慌ただしく準備をして11月、帰国した。

原体験

2～3ヵ月はのんびりと今後のことを考えるつもりだった。すると2週間後、「九州で公共の博物館の仕事があるのだけど、興味ある？」と美術大学で助手を務める知人からの電話。迷いなく返事すると、数日後には大学の研究室をベースに新たな仕事がはじまった。しばらくして、共同で事務所を設立、シェアオフィスのデスクを借りた。かくして一本の電話から長期休暇は幻となり、そのまま早回しの現実世界を20年間走り続けているかのようだ。（ちなみにSDLの香港プロジェクトはまもなく再開し、前号挿絵にあるように香港市立大学の校舎として2011年に無事竣工した）

さて、仕事は設計業務の発注者である自治体のコンサルタントとして、展示計画、企画運営の観点からプロジェクトについて助言することだった。建築設計はすでにスタートしていたが、市はこれまでにない新しい博物館をつくるため、展示の制作や企画の現場を知る大学の知見と若手の柔軟な発想力を求めていた。ただし僕らも専門は建築。設計打ち合わせには、発注者側の立場にも関わらず模型や図面を持って行くこともあり、いくぶん緊張感のあるやり取りが続いた。一方、僕らは建築工事以外の展示や情報システム、関連予算配分の計画等の与件、つまり「建築のプログラム」に関与することができた。設計側としても、そのような者が発注側にいることは設計の前提を明確化するうえでメリットにもなり得る。行政のモチベーションの高い担当者にも恵まれ、次第に一体感のあるチームとして一線を画す文化施設をつくろうという機運が醸成されていった。建築は2007年、工房を備え、人材育成を主眼とした画期的な公共施設「北九州イノベーションギャラリー（現・スペースLABO Annex）」（以下、KIGS／設計・監理：佐藤総合計画／総合設計監修：StudioNODE）として無事開館した。設計監理者や施工者含めた現場の方々からは、性能やディテール、工法等について多くを学んだ。竣工から15年以上経ったが、近年、設計担当のおふたりは、『Bulletin』にも寄稿されている。異なる立場でプロジェクトに関わった者同志、JIAという専門家のコミュニティによって再び繋がることができることに感謝したい。

「拡がる建築家の職能と職域」

ところで、この『Bulletin』の編集長を拝命した2020年度、年間テーマとして「拡がる建築家の職能・職域」を設定した。このテーマの原流をたどれば、KIGSでの発注者支援の立場や協働の経験にたどり着くだろう。建築の設計監理者という立場としてだけでなく、建築家として多様なプロジェクトに多面的な関わり方の可能性があることを身をもって知る、いわば原体験のような仕事であった。その影響は、2018年に開館した「都城市立図書館」（空間デザイン総合監修を担当し、本誌294号に寄稿）や、2022年プロポーザルにおいて最優秀に選定され、現在実施設計中の「静岡県新県立中央図書館」（設計：C+A・アイダアトリエ・日建設計（エンジニアリング）共同企業体）にも及んでいるのは間違いない。

建築とそれが内包するプログラムの創造的な関係について引き続き思考と実践を深めていきたいと思う。

開館記念ワークショップ

KIGS竣工写真（撮影：四宮佑次）

委員長・地域サミット合同会議報告

関東甲信越支部
常任幹事
安川　智

最終回となる今回は、3月6日に建築家会館で開催された「2023年度第2回委員長・地域サミット合同会議」について報告する。今回は約50名の委員会・地域会の代表者が参加し、3部構成で情報交換および交流と議論が繰り広げられた。

第1部「社会から求められる建築家とは」
～JIA建築家大会2023東海in常滑から～

第1部は昨年10月に開催されたJIA建築家大会2023東海のプレウィークの2つのイベント報告である。1つ目は「注目の若手建築家による建築討論」で、3組12名の若手建築家による活動紹介とディスカッションの様子を報告(田口知子副支部長)。地域の気候風土や文化に寄り添う建築家、地域資源を活かし地域活動を支える建築家、まちの居場所をつくり設計から運営までを手掛ける建築家等、ハードをデザインするという旧来の建築家の職能の範囲を越え、現在の社会と呼応する新たな建築家像を見ることができた。(文末YouTubeリンク参照)

2つ目は、昨年10月16日に建築家クラブで行われた「資格制度のこれから」を考えるシンポジウムの報告(慶野正司副会長・支部相談役)。建築家の職能を社会に定着させる「建築家資格制度」が2003年にスタートし、約20年を経て制度の行き詰まり感があることを鑑みて、制度改革を検討した「理事懇談会のまとめ案」が作成された。このシンポジウムは今後全会員レベルで協議を進めるための意見交換の場であり、パネルディスカッションやアンケートの内容は開催報告書として全26ページの冊子にまとめられている。JIA建築家大会シンポジウムをはじめ、『JIA MAGAZINE』や『Bulletin』でも紹介されているため、多くの方が目にされていると思うが、制度改革のスタートを示す意義あるシンポジウムであったと思う。

第2部　地域会・委員会からの活動報告

第2部では5つの委員会と全地域会の各代表者による活動報告が行われた。1グループあたり2～3分という限られた時間ではあったが、相互に有益な情報交換ができたのではないかと思う。一般市民の参加者の関心を集める企画を立案し、行政の協力も得て社会に対して発信し続けている活発な地域会も見られた。一方、いくつかのグループからは、参加メンバーの固定化と高齢化、若手への世代交代が進まないという嘆き混じりの声も聞かれた。会員数の減少や会の停滞感や存続の危機といった現在JIAが抱える課題を生の声として共有することができた。

第3部　グループディスカッション

第3部は出席者約50名を5グループに振り分け、「建築の未来を『だれ』が作るか」をテーマにグループディスカッションが行われた。構造や設備のように一般の方にわかりやすい「意匠統括」の必要性、「専業／兼業」に対する社会ニーズを踏まえた対応、「建築家」「建築士」「設計者」の職能の違いを社会に認識してもらう重要性、「消費物」ではなく「社会資産」をつくる建築家の役割等、議論は多岐にわたった。社会の変化に追随する形で「社会から求められている建築家のありよう」を考える必要性を多くの会員が感じている状況である。資格制度改革の方向性を明確に示し、関係者を巻き込みながら推進していく必要性があると改めて感じた。

おわりに

若手建築家はこれまでの建築家の職能の枠を越えて、地域産業と連携を図ったり、自らが施設運営をしたりと、個人で地域と積極的に繋がろうとしている。また、ある地域会からは一般の方や行政、仲間を巻き込み、発信し続けることで地域を良くしていくという姿勢を感じる。

建築家は建築をつくればよいという時代はすでに終焉を迎えており、人口減少や過疎化、経済性、多様化、環境問題等、社会が抱えるさまざまな課題に対して、建築がそこにある理由が問われている。建築の先にある未来を想像し、建築を取り巻く活動の場を創造することが重要である。建築家自身が社会を巻き込み、そのリーダーシップを担う存在であるために、私たちも変わらなければいけない。建築家資格制度を考えるにあたっては、建築家の職能を定義し直すことから始めることも必要なのかもしれない。

※JIA常滑若手建築討論「これからの建築家のあり方を考える」/ YouTube

第1日目　第2日目　第3日目　大会イベント

成　人

手嶋　保

独立後、27年が経ち、昨年4月には還暦を迎えた。今の事務所を開設したのは1998年で、所員としての吉村順三設計事務所での仕事が完成したこと、前年に先生が逝去されたことに背中を押された。時は正にバブル崩壊後の経済停滞期に突入した時代、その後の日本は失われた30年といわれ、終始景気は悪かったが、かえって良識を取り戻した時代であったように思う。まだ何者でもない若手に仕事を依頼する奇特な人が果たして現れるものか……海図のない船出であり、ひたすら暗中模索の日々が続いた。

そんなある日、ふと、以前に茶会で相客となった方が、席中で家を建てたいと話されていたことを思い出した。躊躇しながらも思い切って連絡を取ったところ、幸い家はまだ建っておらず、木造住宅の経験を問われた。実は未経験者であることを伝えたうえ、地下1階地上3階の混構造住宅を提案したところ受け入れられ、ついに設計を進められることとなった。

十条にある敷地はたいへん狭隘な路の奥の工事車両が入らない場所にあったので、近隣の方々に説明して回り、沿道のブロック塀を一時的に撤去させてもらうなどの協力を得てようやく実現した。混構造のうち、木構造は板倉とした。断熱材＋36ミリ厚の杉板材を4寸角の柱に落とし込む。堅牢で断熱性の高い家になった。外壁には銅板を張り、時を刻みながら周囲に馴染むことを考えた。板倉は当時出会った構造家の山田憲明さんの発案であった。私自身も修業時代によく奈良で古建築を見ていたので、骨格の明快な建築を希求する土壌があった。山田さんも当時、増田一眞先生の事務所に在職中で、おそらく初めて個人で受けた仕事だったと思う。氏とは酒を酌み交わしながら遅くまで建築やお互いの将来について語り合ったものだ。当時はそれまで習いおぼえた作法や人脈などはあえて一切合切断ち切った上で新たなことに挑戦していくのだという、ある種の悲壮感と高揚感に酔っていた。45度振ったグリッドを用いたプランは間口の狭さを克服しようとした工夫であった。

完成後は『新建築』の本誌にも掲載され、晴れてメディアデビューを飾ることができた。建築家は真摯に設計に励む一方で、その働きを伝えてくれるメディアの存在は貴重で有益なものだ。振り返ると多様な発表の機会を与えられ、多くの方々のご支援と共感を得たおかげで、今に繋がる道が切り開かれたようで感謝に堪えない。

さて、十条の家の次の依頼主は隣家の住人で、日々仕上がっていく建築や私の仕事ぶりを眺めるうちにご自身の家も、と思われてのことであった。敷地は鎌倉の遠く山々を見渡す場所にあり、そこに相応しい建築ができることを待っていた。音響を重視される建主であったため、永田音響の稲生眞さんの協力を得て設計を纏めた経験により、音と建築の関係について多くの学びがあった。平行な壁を持たない自由な平面を持つプランには、自らの建築の展開の萌芽を感じていた。

文字通り寝食を忘れて仕事に打ち込んだが、信頼して任せてくださった建主をいつしか置き去りにしていたようであった。結果、理想的ではあるが、単身者には些か広すぎる家となった。枠回り詳細など施工者に指示し上棟式も終わった頃、実は友人がシステムキッチンを推奨しているので変更したいと言ってこられた。ここは是非ともオリジナルでと、繰り返しお願いしたが、聞き入れてはもらえず、ついには設計を降りることになった。未熟で寛容性に欠けていた私には、建主の真意を理解する心の余裕がなく、それを見透かされた建主の一撃であった。心血注いだ膨大な作業や時間は一瞬にして失われたが、決して我儘ではなく、信じる建築をつくり上げたいという情熱による躓きであった。

建築の純粋な理想と実際に住む人との現実や嗜好との相克は未だに解決できないまま、今も私の足下にある。齢を重ねて多少は柔靭さも身についたが、あの時、信念を曲げていたら、今の私はいなかったかもしれない。成功よりもむしろ挫折こそが学びの宝庫である。あるべき形を求め、そこへ挑戦し続けることが、建築家たる所以であると思っている。建築家としては還暦にして、ようやく成人を迎えたようだ。

ワーク・バランスの実現

ジェームス・ランビアーシ
James Lambiasi

私は東京の設計事務所で29年間働き、10年前に一級建築士事務所を設立しました。現在は、建築設計の他にも様々な仕事をしています。コンサルタントとして、東京で大規模開発を手掛ける米国の大手建築事務所にコンサルティング・サービスも提供しています。また、これまで数多くの大学で教鞭もとってきました。現在は、芝浦工業大学とテンプル大学ジャパンキャンパスで非常勤講師を務めています。今年からは国立近現代建築資料館でも当館の国際的な認知度を高めるお手伝いをしています。

建築家の仕事には波があり、時には圧倒されることもあります。このような時、私は仕事（と健康！）を維持できるか心配になります。しかしそれでも、私はこの一見混沌とした仕事のスタイルを維持してきました。米国を本拠地とする建築事務所のコンサルティングをすることで、母国の設計実務を常に把握することができますし、大学では学生から多くのことを学んでいます。例えば、建築業界は革新的なテクノロジーの影響を受けていますが、その一方で、学生たちは昔ながらの作業で模型を作ったり、自らの手で図面を描くことで建築デザインを深く理解する状況を目の当たりにしています。こうした経験を通して、私の視野も広がり、仕事のバランスが取れるようになりました。

大切なのは、多様な活動をこなす中でも一つ一つが疎かにならないよう、すべてに全力を注ぐことだと考えています。どれか一つが大きなウエートを占めることもありますが、最終的にはすべてが相互に関連し合い、バランスを取るための橋渡し役として機能しているのです。幸運なことに、仕事への情熱を共有でき、刺激をもらえる仲間がたくさんおりますので、さらに仕事を続ける意欲が湧いてきます。

テンプル大学の学生と国立近代建築資料館（上）や東京建築カレッジの木造住宅（左）を見学（2024年2月）

小さなジェスチャー

小山　光

2005年に独立してから最初の12年間は、海外ブランドの店舗設計マネジメントが主な仕事でした。本国からの度重なる図面の変更に対応しつつ、スケジュールとコストをコントロールし、ブランドの本国担当者、国内支社の関係者、ビルの貸主、そして各種工事業者といった、異なる利害を持つ関係者たちの間で調整を行う日々でした。問題が生じた際には、設計的な解決策だけでなく、全員が同じ方向を目指せるようなストーリーを創出する必要がありました。このストーリー作りは、マネジメントをデザインするようなもので、私の創造意欲を刺激していました。

2017年頃からは、テナントビルや投資用集合住宅など、建築の仕事が徐々に増えてきました。これらのプロジェクトは、経済的にシビアで、デザインの余地が限られた、通常、建築家が手を出しにくいものが中心でした。大きなジェスチャーは現実的ではなく、予算と法規の厳しい制約の中で必要最低限のデザインのみが許されます。プロジェクトマネジメントにおけるストーリ作りで創作意欲を満たしていた私にとっては、いくら制約があっても設計ができる環境は天国のようでした。

この経験を通じて学んだのは、建築における小さなジェスチャーでも大きな変化を生み出せることです。平凡なマンションやテナントビルに一工夫加えるだけで、それらの建物に新たな価値をもたらすことができます。限られた条件の中でも、建築が持つ可能性を最大限に引き出す楽しみを噛みしめながら、設計活動を続けていきたいと考えています。

十全化学本社社屋（写真：小川重雄）

交流委員会 Fグループ

活動報告と AHR EXPO見学（米国シカゴ）

交流委員会
Fグループ
日本ビー・エー・シー
玉川厚志

活動報告

私たち交流委員会Fグループは設備工事会社5社、設備機器メーカー19社、計24社で活動しています。2023年度は以下の活動を実施しました。

2023年6月15日：施設見学会（YANMER TOKYOビル）・懇親会、25名参加

2023年9月26日：講演会（畝森泰行建築設計事務所代表 畝森泰行様）・懇親会、21名参加

2024年1月10日：新年会、28名参加

2024年3月13日：2023年度活動報告会（三建設備工業会議室）、14名参加（Web併用）

AHR EXPO見学

当社社員研修のひとつとして、2024年1月22・23日に米国シカゴ市で開催された展示会AHR EXPOの見学に行ってきました。AHR EXPOはASHRAE（米国冷凍空調学会）およびAHRI（米国冷凍空調工業会）が主催するもので、出展社数約1,900社、開催期間3日間の来場者数約35,000人規模となる、空調・冷熱関連では世界最大の展示会です。

そうした中、会場も広く、また北棟と南棟に分かれていることもあり、当社の取り扱い製品やその周辺機器に絞って見学しましたが、それでも2日間朝から夕方まで目一杯時間を要しました。

内容としては、2050年カーボンニュートラルに向けて世界中の空調・冷熱関連メーカーがさまざまな工夫をしていることが実感できました。特に空調関係ではデシカント空調や気化冷却が注目されている印象を受けました。私の思い込みかもしれませんが、米国というのは建物全館空調や、大型ピックアップ車を乗り回すといったように、省エネに関してはあまり熱心でないのではと思っていました。しかし、空調・冷熱関連では各社特徴ある展示を行っていましたし、シカゴの冬というのはマイナス10℃以下にもなる極寒ですが、会場内は熱気に包まれ盛大に開催されていました。

夕食はシカゴ周辺で人気のB級グルメである“シカゴピザ”を堪能しました。日本で普通に食べる“ピザ”と違い、キッシュ？パイ？それともケーキ？とピザ以外のメニューを連想してしまうほど厚みがあるのが特徴です。本場シカゴでは、厚さが3.1cm以上ないとシカゴピザと認定してもらえないそうで、私の入った店では厚みは5cmほどありました。最初はビールにもよく合い食も進みましたが、とにかくボリューミーで食べ応えがあり、終盤は持て余したほどでした。

今回はAHR EXPO見学だけでなく、ボルティモアの米国本社およびミルフォードの工場見学もあり、9日間の米国出張でした。コロナ禍前以来の久しぶりの海外研修で、非常にいい経験をさせていただき今後に活かしていきたいと考えています。

シカゴ市内

AHR EXPO Chicago

交流委員会 Gグループ

点群データによる空間情報の活用について

交流委員会
Gグループ
古池廣行

交流委員会Gグループは、情報開発部会と合同で月1回会合を開き、主にIT関連の勉強会や建物見学会等を行っています。今回は、「3Dスキャナーを利用した歴史的建造物のアーカイブとデジタルツインの世界の実現」という勉強会の内容を報告します。

建築業界のデジタル化の波は「建設DX」という名でますます加速していると思います。建築設計ではCAD化は当たり前となり、3次元CADの出現で「BIM」という用語が建築関係者の間に浸透することになりました。しかし、BIMの普及には、ハイエンドPCの導入が必須となり、特に操作のスキルを取得することが一番難しいため、なかなか浸透していないのも事実です。

例えば、既存建物の改修工事や増築工事などでCADデータがない場合は、既存建物の図面をCAD化することもありますが、かなりな労力を伴います。

そこで最新の3Dスキャナーを使って簡単に空間情報の取得を行った事例を紹介してもらいました。

3Dスキャナーには、接触式と非接触式がありますが、建築で使うのは、非接触式のものが主流となります。また、非接触式にも据え置き型とハンディ型があり、据え置き型は、定点での計測に適しており、精度は高いですが、位置や角度が変えられないデメリットがあります。ハンディ型は、狭い場所や構造物の裏側など測定が困難な場所でも使用できますが、手振れが起こり、据え置きタイプと比べると精度が劣ってしまいます。

今回使用したのは、ウェアラブル型（写真1）という両方の良いところを兼ね備えた製品だそうです。ちなみにこの機種の精度は±5mmで高レベルです。

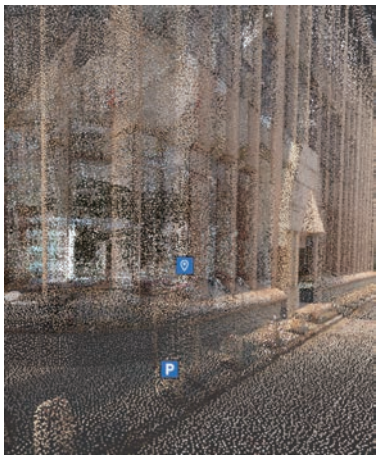
3Dスキャナーで空間をスキャンすると点群データが作成されます。点群データとは「位置情報（3次元座標X,Y,Z）と色情報（R,G,B）を持った点の集合データ」のことを指します。地形や物体などを「大量の点の集合体データ」として表現します。

写真2は、点群データをパソコンのディスプレイに表示した状態のものです。身近なところでは、iPhoneXS以降であれば、「Scaniverse」というアプリを入れることで点群データを作成することができます。スキャンする範囲が大きければ、データの数も増えますが、データをクラウドに置くことにより、標準的なスペックのパソコンでも表示に支障はないとのことでした。

作成された点群データは、パソコンに取り込み、データの合成処理等を行い、必要に応じてポリゴンデータに変換して3DCADで利用することもできます。

今後、ますます手軽に点群データが作成できるようになり、点群データによる空間情報の活用が日常的になることを期待しています。

1. ウェアラブル型3Dスキャナー「NavVis VLX2」



2. 点群データの状態

3. パノラマ写真と点群データを合成した画面

学生の会 @joint（ジョイント） 活動報告

今号は、学生会員個人の活動を紹介する「次世代のタマゴたち」を2名分お届けします。

次世代のタマゴたち

@joint との出会いとこれから

学生の会 @joint　**高橋花穏**
東京電機大学 建築学科 3 年

私がJIAに出会ったのは大学2年の夏休みだった。

JIA入会に至るまで

2年前期の課題で図書館を設計した。そこで自分のスタジオの担当となったのが会田友朗さんである。エスキスではたくさんの参考事例を交えながら、豊富な知識と経験からアドバイスをいただき、学年で一番の評価を貰うことができた。そんなご縁もあり、夏はアイダアトリエへインターンに伺うことになった。事務所はとてもアットホームで、マニアックなクラシックや洋楽が流れる、音楽好きの私にとって興味をそそられる心地いい空間であった。

初めてのインターン。一番最初に与えられた仕事は「Exp. J節約のための案出し兼1Fの内部空間設計」だった。なかなか難しい課題だったが、他のインターン生と共働して設計する楽しさを知ることができた。そして昼食は毎日美味しいご飯をご馳走してくれた。事務所では映画や音楽の話も弾んだ。会話をする中で「きっと向いてるよ」と紹介してくれたのがJIAの学生部会である。

12年前の選択と未来

私は音楽をやっていて、実はフルートを始めて12年目である。つい数週間前までは千葉県少年少女オーケストラに所属し、夏には毎年、TV番組「クインテット」に出ていた作曲家宮川彬良さんと、春にはさまざまなホールでプロの音楽家と演奏をしている。今年は指揮者井上道義さんと東京芸術劇場で共演した。来年は5年ぶりにサントリーホールで演奏会が行われる。すごく参加したいが10～20歳の楽団なので私はもうOGである。

そういうこともあって将来は音楽も建築も続けたいと思っている。また、大学で設計をする中で、どうやら私は設計よりも企画の方が好きで得意なことが分かってきた。例えばこれまで私が考えた中で、「4面スクリーンの没入型音楽ホール」というのがある。音楽家は情景を思い浮かべながら演奏をする。ここでは事前に音楽家と映像作家が話し合い、音楽に合わせた映像を作ってもらう。音楽を視覚も使って聴くことでさまざまな人が親しみ、楽しむことができるのではないかという発想だ。このような感じで案をたくさんストックしている。

今年は就活なので、JIAでの活動や出会いなどを活かして、将来に繋がるスキルを得られる仕事や、自分を応援してくれる人を見つけられたらいいと思う。

次世代のタマゴたち

まちの本棚

—まちの人が集い、出会い、学ぶ場—

学生の会 @joint　**紫安洋平**
日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修士 2 年

「人と人がつながる空間ってどんな空間なのか」という問いから始まったのが、今回紹介するプロジェクトの原点です。下北沢にあるシェアハウスのピロティで、シモキタの人やシモキタに来た人が立ち寄れる「まちの本棚」を企画し、設計しました。

私は、多様な人々が暮らす学生寮に入っていた経験から、人と人がどのようにつながるのか、その空間に関心があり、また、地域の人とのつながりはどのように生まれていくのかを考えてきました。そんな中で学生寮で出会った仲間に誘われてこのプロジェクトが始まりました。

これまで実際に空間をつくったことがなく、今回が初めての実施プロジェクトでした。本という1つのツールを用いて、人々が集い、出会い、そして学ぶ空間を目指して設計に取り組みました。設計をしたのは本棚という小さな作品ですが、自ら素材や寸法を決めて、そして実際に作ると

「まちの本棚」竣工写真

シェアハウスの
ピロティに本棚を設計。
人が集える空間を目指した

いう経験を通して、今までには体験することができない多くの学びがあるなと感じました。また、竣工後に実際に地域の人や通りすがりの人が使っている様子を見ると、とても達成感があり、これからの運用方法を考えたくなりました。ゆくゆくは、本を通じてシモキタの面白さがのぞける場所になり、そしてみんなの縁側のような存在になっていくように、これからも頑張っていきます。

広報からのお知らせ

編集長 退任の挨拶

歴史の一コマ

2023年度『Bulletin』編集長
佐久間達也

憂鬱なコロナ禍もほぼ通り過ぎて、あっという間の1年間でした。初めての編集長という任務を、広報委員をはじめとする多くの方々のおかげで終えることができました。無事に4号発刊できて、胸を撫で下ろしています。『Bulletin』を通じて新たにたくさんの方と知り合えて、大変有意義でした。既知の人に執筆をご依頼するときは、その当時を思い出しながら連絡をとるのですが、そのつど人とのつながりの有難さを感じます。

『Bulletin』編集の内側では、さまざまな仕組みが大変よくできており先代の苦労を感じます。これまでの蓄積を受け継ぎ次へとつないでいくJIAの歴史の一コマに過ぎませんが、そこに関われたことは大変光栄です。『Bulletin』は会員向けの会報誌ですが、会員外の人に冊子を見せて良い反応をもらえたこともあります。今年度は副編集長として作業に参加しますが、さまざまな情報に溢れた現状の中、より良い記事をご紹介することに努めたいと思います。4月より、広報委員ではベテランといえる関本竜太さんが再び編集長となります。関本さんにはこの1年間、多くの場面で助けていただきました。今後さらに『Bulletin』は進化していくと思いますので、引き続きどうぞご期待ください。

〈佐久間達也空間計画所〉

編集長 新任の挨拶

持続可能な『Bulletin』編集をめざして

2024年度『Bulletin』編集長
関本竜太

このたび、佐久間編集長の後を引き継ぎ2024年度の『Bulletin』編集長を務めさせていただくことになりました関本竜太と申します。私自身は2021年度にも一度編集長をお引き受けしましたので、これが2度目の編集長就任ということになります。

『Bulletin』誌の歴史は、JIAが新日本建築家協会として発足した1987年に遡ります。この年に創刊した会報誌『Bulletin』はその後37年の年を経て、今号では記念すべき300号の発刊を迎えることとなりました。巻頭特集の座談会では歴代の編集長も集まり、それぞれの時代の苦労話や意識も聞けて、これからの『Bulletin』のあり方についてもヒントをいただけた気がしました。

『Bulletin』編集WGも他の委員会や地域会などと同様に、メンバーの後任不足や、多忙な仕事との両立といった問題を多く抱えています。今年度編集長に再就任するにあたっては、自らを「統括編集長」と位置付け、特集記事なども含めて編集長がすべてを取り仕切るのではなく、担当者が自らのモチベーションによって企画を考え進めていけるよう取り組みを見直し、充実した誌面づくりを続けていける持続可能な編集体制となるよう変革をしてまいりたいと考えています。今年度の『Bulletin』にもどうかご期待下さい！

〈リオタデザイン〉

『Bulletin』300号 発刊記念に寄せて　編集後記

■左官職人の久住有生さんのお話に震撼！幅広い好奇心を満たしてくれる『Bulletin』はついに300号。 今年も頑張ります！(小倉)

■3年ぶりの編集長再任がよりによって300号記念号、かなりのプレッシャーでした！なんとか特集もまとまりほっと安堵しています。(関本)

■建築家の皆さんが忙しい中時間を割いて記事を書いている『Bulletin』の歴史を改めて知ることができました。歴史を紡ぐ一端を担えて光栄です。(小山)

■話を聞いてみたい方への原稿依頼、お引き受けいただければうれしく、そうならなくても打ち合わせの機会を得て、いい刺激になります！(大塚)

■JIA入会直後に委員になり、当時連載開始の「抱負を語る」第1回目を書いた。あれから100号積み上げ、ついに300号おめでとう！(中澤)

■6年前に広報委員会に入り、任期最後の年に『Bulletin』300号の特集に関わることができました、良い経験ができました。(望月)

■コロナ収束後の支部活動の活性化に期待。どんどん『Bulletin』の誌面を賑わせて情報共有し、発信していければ嬉しいです。(会田)

■所属する長野地域会の建築祭での卒業設計コンクールと文化講演会は30回を超える。積み重ねられていることを改めて感じました。(竹内)

■『Bulletin』300号。バックナンバーで振り返り、改めて歴史の重さを感じました。(市村)

■『Bulletin』は建築家の思いに触れる「窓」。WGとして深い知識と洞察力がこの窓を支えていると実感。300回の努力は未来に繋がる。(知見)

■創刊300号記念。『Bulletin』創刊号から現在までの道のりを振り返る貴重な体験でした。歴代の編集長・委員長、委員の皆さまに感謝！(田口)

■毎号定期的に発刊することは大変なことだと実感しています。今後も『Bulletin』の刊行が永く継続されることを願っています。(佐久間)

■創刊300号おめでとうございます！次号からの本格的な参画となりますが、魅力的な誌面づくりに貢献したいと思います。(渡辺)

■広報委員になり、編集作業への委員の皆様のご尽力に驚いております。300号という長い道のり、歴代の委員の皆様、おめでとうございます！(永峰)

■300号という数字に歴史の重さを感じます。これからもさまざまなことが『Bulletin』を通して共有されていくのが楽しみです。(野村)

■『Bulletin』300号、おめでとうございます！大きな節目に立ち会えたこと、大変嬉しく思います！(伊藤)

編集　：公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長　：田口知子
副委員長：関本竜太
委員　：望月厚司・竹内祐一・佐久間達也・大塚浩子・磯野智由・小倉直幸・小山光・永峰麻衣子・渡辺猛
編集長　：関本竜太
副編集長：佐久間達也・小倉直幸
編集ワーキングメンバー：広報委員＋市村宏文・中澤克秀・会田友朗・野村月咲・伊藤綾香・知見徹摩・立石博巳
編集・制作：南風舎

Bulletin 300　2024 夏号
発行日：令和6年6月15日
発行人：大西摩弥
発行所：公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹　Fax：03-3408-8294
印刷：株式会社 ココラボ

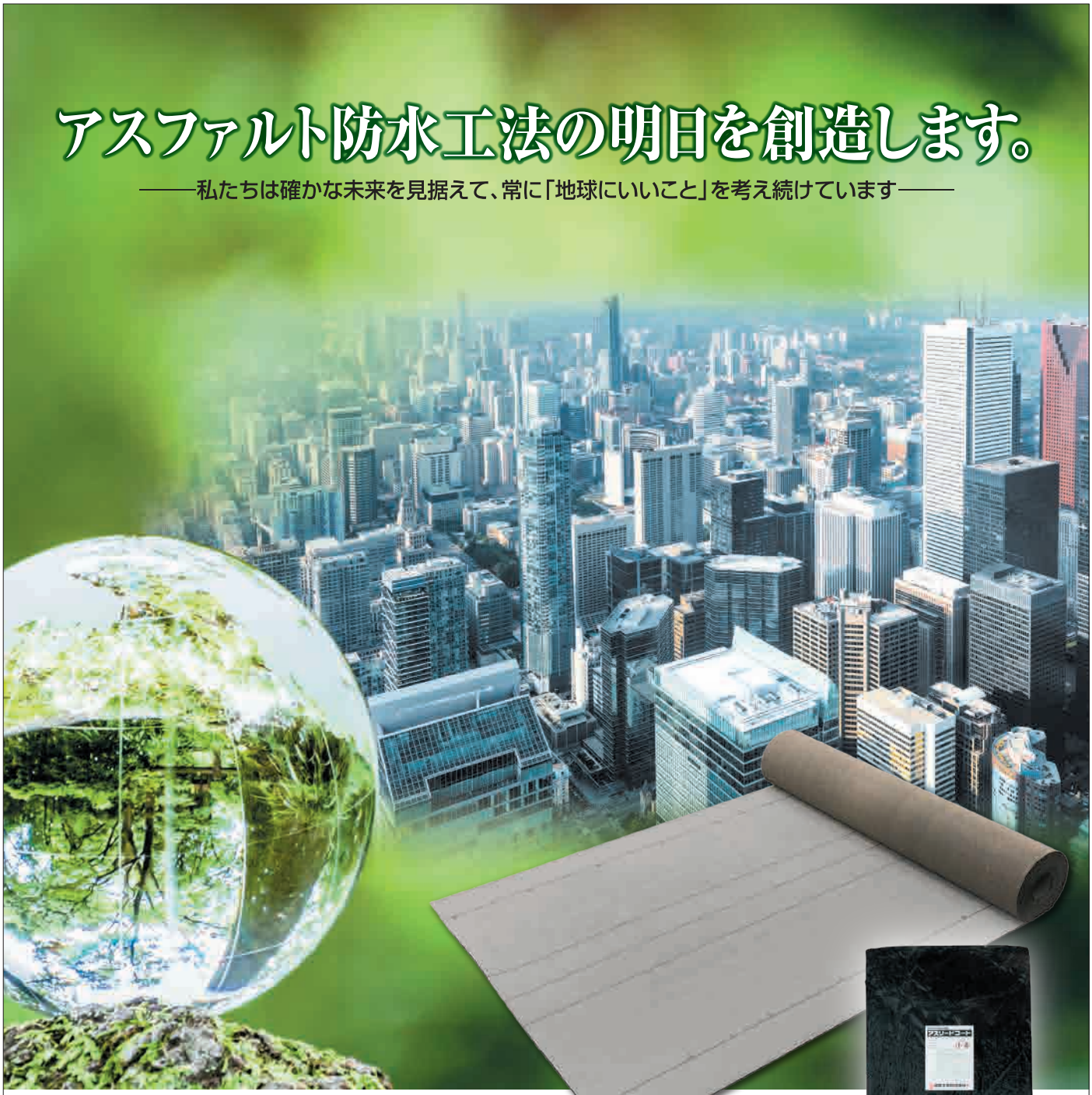
■JIA関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社) 日本建築家協会 (JIA)　https://www.jia.or.jp/
・JIA関東甲信越支部　https://www.jia-kanto.org/

■ 定価 300円＋税／会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2024

アスファルト防水工法の明日を創造します。

――私たちは確かな未来を見据えて、常に「地球にいいこと」を考え続けています――



▲アスリードルーフ

アスリードコート▶

NEW 加熱型改質アスファルト塗膜防水工法

アスリード工法

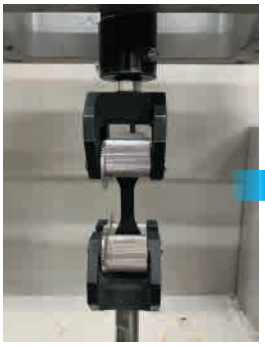
「アスリード工法」は、アスファルト防水熱工法の明日を率いる革新的な防水工法です。超耐久ルーフィング（アスリードルーフ）を採用し、防水工事用アスファルトを高耐久・高伸長改質アスファルト塗膜防水材（アスリードコート）とすることで、「信頼性」「耐久性」を保持しつつ大幅な「施工省力化」を実現しました。

信頼性の高い熱工法

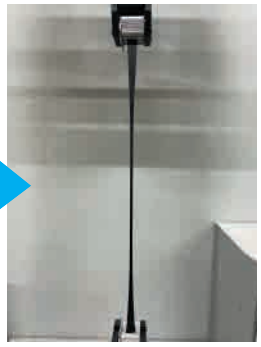
- 実績のあるアスファルト防水熱工法による信頼性。

施工省力化

- 単層保護仕様や立上り塗膜工法の採用。
- 端末はビス穴を開けることなく塗膜＋メッシュ納めが可能。



引張前



引張後

総合防水材料メーカー
日新工業株式会社
https://www.nisshinkogyo.co.jp/
営業統括部 〒120-0025 東京都足立区千住東 2-23-4 TEL：03-3882-2571 FAX：03-3881-8545

ミズ太郎

アスリード工法 検索